プチ労ブックレット No.3

プチ労版「ロシア革命史」

～レーニン「国家と革命」を読むために～

（ロシア革命で花開いたロシア・アヴァンギャルドのポスター）

プチ労のみんなで読んだマルクスの「共産党宣言」は
1848 年パリ 2 月革命の 2 日前に出版された。
1917 年 10 月ロシアで労働者の革命を実現したレーニンは
その 2 ヶ月前に「国家と革命」を書いた。
今、日本で「国が国が」と言われる「国家」とは何か。
それに対する「革命」とは何か。
それを考える手がかりとして「国家と革命」を読む前に
プチ労でやった「大衆の蒸気が実現したロシア革命史」の記録。

目次

まえがきに代えて―革命の動力、いくつかの視点、全体の概要・・・・8

第一回　前史（1848 年～1903 年）―2015 年 4 月 26 日プチ労その 60

１．1848 年　「共産党宣言」・・・・12
―労働者の戦闘の旗印をはじめて高く掲げた「共産党宣言」出版

２．1860 年代　「農民の解放」と「ドイツの労資折り合い主義」・・・・14
―資本主義の遅れたロシアの中途半端な”農奴解放”
―ラサールの「賃金鉄則」とマルサスの「人口論」
―ドイツ社会民主党の“折り合い主義”

３．1870 年代　「パリコミューン」・・・・18
―「労働者階級のためについに発見した政治形態」パリコミューン
―「戦争やめろ！」立ち上がる労働者
―コミューンの選挙
―コミューンの画期的な施策の数々
―コミューン、労働者の動力が歴史をつくる
―コミューンと農民

４．1880 年代　「8 時間労働制」・・・・26
―ロシアの経済高度成長と初の労働組合結成
―世界では「8 時間労働制」の闘いとメーデー
―ロシア革命でやっと実現した「8 時間労働制」と日本

５．1890 年代　「政治スト」・・・・28
―ロシアの労働運動の発展
―「政治スト」

６．20 世紀初頭　「党」・・・・30
―「労働者の党」とは何か？
―”極悪人”？レーニンの「なにをなすべきか」
―党がなすべきこと”革命のリアリティーを充満させる”

第二回　1905 年の革命—2015 年 5 月 24 日プチ労その 61

１．　「血の日曜日」・・・・34

２．　革命を担うプロレタリアと労働組合・・・・36
—合法的労働運動は社会主義運動の新しいより広い基盤
—プロレタリアがブルジョア革命を担える
—“革命政府の萌芽”ソビエト。その基本的力は労働組合

３．　戦艦ポチョムキンの反乱・・・・38
—労働者 Striker⇒農民蜂起⇒兵士の反乱
—腐った牛肉に怒る水兵

４．　第一次ブルジョア革命・・・・40
—10 月勅令
—モスクワ蜂起失敗

５．　党と労働組合・・・・42
—政治に関わるな！労働組合の「中立」
－党と労働組合
—アナルコ・サンディカリズム（無政府組合主義）

６．　「革命の敗北」・・・・44
—なぜ革命は敗北したか
—「敗北」の反響　労働者の「意識」

７．　第一次世界大戦勃発・・・・46
—労働運動再興
—「戦争拒否」バーゼル宣言
—「祖国を守れ」
—ドイツ社会民主党の裏切り

８．　帝国主義戦争を内乱へ・・・・48
—スイス・ツインメルヴァルド会議
—大衆の新たな爆発の気運

９．　革命ははじまっている・・・・48
—1905 年の革命
—レーニンの「ドリン！ドリン！」

第三回　1917 年の革命—2015 年 6 月 21 日プチ労その 62

1.　たちあがる革命の動力

（1）2 月革命・・・・54
—5 日間
—自由主義者、協調主義者のソビエト
—ソビエトが「頼んで」ブルジョア臨時政府樹立
—2 月革命は誰が指導したか
（2）レーニンの 4 月テーゼ・・・・58
—臨時政府「戦争継続」決定
—レーニン帰国
—「狂人のたわごと」「精霊が飛びたつ」4 月 4 日テーゼ
—労働者が反応。4 月事件
—大衆の武装解除をさせるな
（3）闘い続ける労働者、逃げるブルジョア・・・・61
—８時間労働制の闘い
—戦争の打撃とブルジョアの逃亡
—労働者に見えてきたこと「国を変えることだ」
—工場委員会、労働組合増加とボルシェビキ支持急増
（4）農民の蜂起・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
—動かない農民、動かないソビエト
—動いた農民
—「地主の財産は我々のものだ」
—「ボルシェビキをくれ！」
（5）ソビエトの変化・・・・・・・・・・66
—7 月事件
—ソビエトの失墜と拡大
—コルニーロフの乱と労働者の武装
—ソビエト、再び闘う機関へ

（６）レーニンの「国家と革命」・・・・68
—革命の「未来」が必要
—古い国家をソビエトに取り替える
—ブルジョア独裁からプロレタリア独裁へ
—プロレタリア「独裁」による「民主主義」の実現
—民衆の支配がデモクラシー
—民主主義と暴力
—「街頭」と「議会」の中間、ソビエトは「民衆の支配」の機関
（７）ボルシェビキの「迷い」と武装蜂起決定・・・・72
—勤労者は国家を動かせるか
—武装蜂起決定
（８）国家の特殊な力—兵士の合流・・・・73
—軍事革命委員会発足
—国家の「特殊な」力の解消

2.　革命
（１）10 月 25 日—暴力の「沈黙」・・・・74
—前夜
—25 日
（２）大衆の「政治」が革命を実現した・・・・76
—大衆の「ソビエト議会主義」
—ブルジョアの逃亡、新中間層の反対
（３）ソビエト大会—講和と土地と労働者の統制・・・・77
—空砲のなかの大会
—ただちに講和と土地と労働者の統制
—ケレンスキーの内乱終了

3.　たちあがった革命の動力の行方
（１）「汚らしい平和」でも戦争やめる・・・・80
—ブレスト・リトフスク条約
—社会革命党の反乱
（２）反革命との戦い、農民との闘争・・・・82
—反革命との闘い
—農民との闘争
（３）ドイツ革命・・・・83
—11 月革命

—1 月蜂起
—ワイマール共和国、ファシズムへ
（4）革命 1 年後・・・・・・・・・・・・・84
—「労組の国家化」政策の停止
—「ブルジョア化」との闘い
（5）憲法制定議会とソビエト憲法・・・・85
—憲法制定議会選挙と解散
—ソビエト憲法
（6）ロシア・アヴァンギャルドの開花・・・・88
（7）スターリンは「巨大な革命の動力」を恐れた・・・・90

4. まとめに代えて—100 年前のロシア革命と今の日本・・・・90

（1）「プロレタリア独裁⇒民衆の支配：デモクラシー」と
「自由民主主義」の日本
（2）輸入 8 割で、世界の農民と非正規労働者に依存する日本
（3）今、8 時間労働制を壊し、非正規 9 割を狙う日本
（4）「原発と戦争と天皇制で儲けようとする」日本

今、レーニンが目をこらした時代が

近づいている

「黙って従う国」ではなく

労働組合に集まり、評議会を創り

「民衆の社会」を創ろう！

2011 年 3 月 11 日から

革命は始まっている

ロシア・アヴァンギャルド
絵本「サーカス」から

参考文献

・「レーニンと労働組合」呂嘉民（中国労働運動学院教授）1987 年
・「国家と労働組合」丹沢望　国際労働運動 2014 年 4 月号～2015 年 2 月号
・「ロシア革命史」トロツキー　1930 年（1929 年ロシア国外追放後）
・「レーニン」ロバート・サーヴィス　2000 年
・「フランスの内乱（パリコミューン）」マルクス　1871 年
・「パリコミューン」ジョルジュ・ブルジャン　1953 年
・「未完のレーニン」白井聡　2007 年
・「新版：都市と蜂起」高知聡　2003 年
・「物質の蜂起をめざして」白井聡　2010 年
・「永続敗戦論」白井聡　2014 年
・「世界をゆるがした 10 日間」ジョン・リード　1919 年 1 月
・「はじまりのレーニン」中沢新一　1994 年
・「ロシア・アヴァンギャルドのデザインー未来を夢見るアート」海野弘　2015 年
・「幻のロシア絵本（1920－1930 年代）」芦屋市立美術博物館　2004 年

・「なにをなすべきか」レーニン　1902 年
・「ペテルブルグのストライキ」レーニン　1905 年 1 月（全集 8 巻）
・「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」レーニン　1905 年 7 月（全集 9 巻）
・「我々の任務と労働者代表ソビエト」レーニン　1905 年 11 月（全集 10 巻）
・「1905 年の革命についての講演」レーニン　1917 年 1 月（全集 23 巻）
・「現在の革命におけるﾌﾟﾛﾚﾀﾘｱｰﾄの任務について」レーニン　1917 年 4 月（全集 24 巻）
・「国家と革命」　レーニン　1917 年 8 月（全集 25 巻）
・「ボルシェビキは権力を維持できるか」レーニン　1917 年 10 月（全集 26 巻）
・「憲法制定議会のテーゼ」レーニン　1917 年 12 月（全集 26 巻）
・「勤労被搾取人民の権利の宣言」レーニン　1918 年 1 月（全集 26 巻）
・「憲法制定会議の解散についての布告草案」レーニン　1918 年 1 月（全集 26 巻）
・「プロレタリア革命と背教者カウツキー」レーニン 1918 年 10 月（全集 28 巻）
・「労働者・農民・カザック・赤軍代表ソビエト第六回臨時全ロシア大会：革命 1 周年についての演説」レーニン　1918 年 11 月（全集 28 巻）
・「労働組合第二回全ロシア大会報告」レーニン　1919 年 1 月（全集 28 巻）
・「憲法制定議会選挙とプロレタリア独裁」レーニン　1919 年 12 月（全集 30 巻）
・「共産主義における左翼小児病」レーニン　1920 年 4 月

まえがきに代えて

革命の動力～トロツキー「ロシア革命史序文」から

・1917 年のはじめの 2 ヶ月、ロシアはまだロマノフ君主制だった。人口 1 億 5 千万人の国で、この頃ボルシェビキのことを知っている者はほとんどなかったが、8 ヵ月後には権力を握っていた。そのような急激な変革は歴史上に二つと見出せない。

・革命の最も疑いない特徴は、大衆が歴史上の事件に直接関与すること。

・革命的事件の動力学は、革命の始まりと終わりの間の社会の経済基盤と諸階級の社会的基層に生じる変化を持ち出すだけではまったく不十分で、革命以前にできあがっている諸階級の心理の、急激な、緊迫した、激しい変化によって直接規定される。

・社会は、実際には既存の制度を永久に与えられたものとして受け取る。何十年にもわたる野党的批判も大衆の不満にたいする安全弁かつ社会体制の安定の条件にすぎない。

・必要なのは、不満から保守主義の枷を切り離し、大衆を蜂起へ導くような、個人や党の意志と関わりのない、まったく異例な条件。

・したがって、**革命期の大衆の考えや急激な変化は、人間の心理の柔軟性やうつろいやすさに由来するのではなく、反対に、その根深い保守性に由来する。**

・大衆はできあがった社会改造計画によって革命を開始するのではなく、旧来のものには耐え得ないという鋭い感覚によって革命を開始する。

・政党や指導者の役割は大衆自身の政治過程の研究をもとにしてはじめて理解できる。指導組織なしには、大衆のエネルギーはピストンつきのシリンダーに注入されなかった蒸気のように発散してしまうだろう。
しかし、
動力をつくりだすのはやはりシリンダーでもピストンでもなく、蒸気である。

ロシア革命史のいくつかの視点

「根深い保守性を持った大衆」が「蒸気」をどう革命期に発していくのか？

さらに、ロシア革命の特徴として 2 点。

１．　戦争のなかでの 8 割の農民の「農民戦争」と 2 割の労働者の「蜂起」による革命
２．　ソビエト（評議会：労働者・兵士・農民の自治組織）と労働組合（ストライキ委員会）と党（大衆に問われ続けた党派闘争）との関係

今の日本との関係で 2 点。

１．　100 年前のロシア革命での「8 時間労働制」の確立と「残業代ゼロ法」の日本
２．　「直接には君主制を打倒」（実質は、うんざりした大衆が「ソビエトにより、勤労者の支配権―政治的民主主義を確立」トロツキー）したロシアと「戦争と天皇制」を掲げる日本

●4 月 26 日プチ労６０：ロシア革命史第 1 回「前史（1848 年～1903 年）
●5 月 24 日プチ労６１：ロシア革命史第 2 回「1905 年革命」
●6 月 28 日プチ労６２：ロシア革命史代 3 回「1917 年革命」
●7 月 26 日プチ労６３：「国家と革命」第一回

注）日付について：1917 年 10 月革命後に西暦にあわせたソビエト暦にされるまで、西暦より 13 日遅れたロシア暦による日付。

全体の概要

☆4 月 26 日プチ労 60：ロシア革命史第 1 回（前史）

ロシア革命の前史として、ソビエトのモデル「パリコミューン」と「8 時間労働制の闘い」を中心とした欧米労働者の盛んな闘いの歴史があった。
急速な工業化と皇帝の抑圧の続くロシアでは、20 世紀初頭、欧米でもまれな労働者の「政治スト」が盛り上がり、未だ方向性を見出しえない多数の農民とともに、「革命への圧力」が強まっていた。
そのなかで 1903 年、レーニンたちの党は、「革命の党とは何か」をめぐって分裂した。

☆5 月 24 日プチ労 61：ロシア革命史第２回（1905 年の革命）

1905 年「血の日曜日」で大衆の「蒸気」が吹き上がり、自らの組織「ソビエト」を生み出したが、労働者・農民の社会主義革命には至らず、皇帝に押さえ込まれた。
さらに、帝国主義戦争が第一次世界大戦となり、各国の社会主義者が戦争に賛成した。その「絶望の淵」で、レーニンは、スイスで孤立しながらも勉強を続け、「1905 年から革命は始まっている」と言う新たな確信を持ち、「帝国主義戦争を内乱へ」というスローガンを生み出した。
彼は、ある意味、ウキウキしていた。2 月革命まであと数日。
″革命の蒸気の動き“からいえば、日本も 2011 年 3 月 11 日から革命は始まっている。

☆6 月 21 日プチ労 62：ロシア革命第３回(1917 年の革命)―まとめを兼ねて

1.　たちあがる革命の動力

1905 年の革命以来、ロシアの大衆は「ソビエト」を創造した。工場でのストライキ、農村での蜂起、兵士の反乱から、ソビエトは創られた。

民衆の武装と闘いのなかから組織されたと言う意味で「街頭」とつながり、大衆が自ら「評議」する機関であるという意味で「議会」であるソビエトは、「街頭」と「議会制民主主義」で言う「議会」との中間の絶妙な位置を占める。

もともと、民主主義＝デモクラシーの言葉は、ギリシャ語の「デモス＝民衆」と「クラシー＝支配」すなわち“民衆の支配”。ギリシャ市民から見れば、それは民衆が武装し暴動を起こしたカオスであり忌避すべきものだった。

レーニンは、大衆が創造したこの絶妙な機関ソビエトを通じて、「プロレタリア独裁」、つまり、カオスだけではない「民衆の支配」を実現しようとした。

2.　1917 年 10 月の革命―「民衆の支配」が出発した瞬間

「蜂起はどこにもない」「我々は一人の犠牲者も知らない」「臨時政府は敵国の首都にいるようだ(政府の将軍)」武装した民衆に政府軍が合流し、革命の瞬間には暴力が「沈黙する」夕凪のように。

「大衆は 1917 年 2 月以来 8 ヶ月にわたって、緊張した政治生活を生きてきた。“ソビエト議会主義”が、大衆の政治生活の日常のメカニズムになった。それが革命の実現を基盤だった。」トロツキー

3. たちあがった革命の巨大な動力の行方

レーニンはこの「動力」が革命を維持・発展させると考えた。「ただちに下から大衆自身の創意により国家生活全体の大衆の積極的な参加により上からの監督を抜きにし官吏を抜きにして民主主義を打ち立てねばならない」

約束どおりただちに、戦争をやめ、地主の土地を農民に配り、労働組合に国家全体の生産統制をまかせた。労働者、兵士、農民は熱狂して向かえた。

1918 年ソビエト憲法では、世界ではじめて、8 時間労働制と女性の選挙権を明記し、一方で、搾取者「利潤を目的として賃労働者を雇う者」には選挙権は与えないとした。

その後、日米シベリア出兵、国内反革命との闘争、食糧危機に伴う農民との闘争、ドイツ革命の失敗を経て、無秩序、混乱が生じるなかで、「世界での革命」と「民衆全体の統治」を実現しようとした。

しかし、レーニン死後、スターリンは労働組合と農民と世界での革命に期待せず、「ロシア 1 国で社会主義はできる。それを効率的に」と、ロシア・アヴァンギャルドも生んだ「革命の巨大な動力」を恐れ、扱えずに蓋をした。

４．　まとめ―今、レーニンが目をこらした時代が近づいている。

2015 年 4 月 26 日プチ労その６０

第一回　前史（1848 年～1903 年）

主役は、資本家（ブルジョア）と労働者（プロレタリア）。
あと、資本家の脇に王(皇帝)とその“親戚”。労働者の横に農民。
この 4 者で歴史が展開する。

１．1848 年　「共産党宣言」

―労働者の戦闘の旗印をはじめて高く掲げた「共産党宣言」出版

マルクスとエンゲルスが書いた「共産党宣言」の出版は、パリ 2 月革命の 2 日前。パリでは、労働者の蜂起にブルジョア共和主義者が乗っかって、王ルイフイリップを倒した。

フランスでは、18 世紀末の「フランス革命」以来、何度も何度も労働者の力で体制を倒しているが、そのたびに、政府や権力の実権をブルジョアにさらわれている。

この 2 月革命でも、「社会主義者」が政権に入り、労働者の失業対策のために「国立作業場」が開設されたが、6 月には、労働者の力を恐れた共和主義者の意向で閉鎖。

労働者は「6 月蜂起」したが鎮圧され、社会主義的政策は終わった。この不満が 2 回目の「皇帝」登場を許すことになる。

一方、資本主義の先進国イギリスでは、当時、炭鉱などの労働者の、長時間・低賃金・児童労働など資本家のひどい扱いに対する闘いがひとつの頂点を迎えていた。

最初は、ブルジョア共和主義者とともに普通選挙権を求める運動としてはじまった「チャーティスト運動」。1824 年に人々が集まることさえ禁じていた「団結禁止法」を廃止させ、1938 年には「人権宣言：People’s Charter」（チャーティストの名はここから）。

その後、労働者の運動がストライキなど連続して過激にならざるを得ず、ブルジョア共和主義者は脱落し、1848 年には「10 時間労働法」を勝ち取った。

フランスパリ 2 月革命

1840 年代　イギリスの炭鉱で働く子ども達

２．1860 年代　「農民の解放」と「ドイツの労資折り合い主義」

—資本主義の遅れたロシアの中途半端な“農奴解放”

そういうフランスとイギリスに 1856 年のクリミア戦争で手ひどく負けたロシアの皇帝アレクサンドル 2 世は、ロシアの近代化と工業化の必要を痛感し、それに必要な限りで、1861 年、農奴制を廃止することにした。
だから、その農奴”解放“はひどく中途半端。

当時のロシアの人口６～７千万人。そのうち８割を占める農民の半数近い農奴 2300 万人に人格の自由を与えた。しかし、一部零細な農地を有償で分与したが、皇帝、地主、寺院の広大な領地と共同体所有地（農村共同体）を多く残した。

農民は零細な農地を買うのに借金したが食っていけず、結局、土地を手放し、土地なし農民を 400 万人も生み出した。

土地をなくした農民が大都市の工場の労働者になるとともに、農村では、多くの農民が農村共同体を中心に不満と窮乏のなかに溜まっていた。ロシアではこれが「革命の動力」になっていった。

一方、日本では同じ頃の 1867 年が明治維新。江戸時代の「士農工商」をなくし、実質、農奴と変わらなかった農民を「四民平等」としたが、同時に、「地租改正」を行い、「土地私有制」をはっきりさせた。

小作農民の不満と窮乏はロシアと同じようにあるのに、地主と小作人の関係がはっきり作られ、「革命」を抑える体制が作られた。

同じ頃、ヨーロッパの先進資本主義国では、増加する労働者は労働組合をつくり、1863 年イギリス、1868 年フランスで労働組合会議結成という全国的な組織化が進んだ。さらに、マルクスが規約を起草して、各国の社会主義者が連携する「国際労働者協会」（第一インターナショナル）を結成する。

—ラサールの「賃金鉄則」とマルサスの「人口論」

ドイツでは、学者で社会主義者というラサールが、後の「ドイツ社会民主党」の母体ともなる「全ドイツ労働者協会」をイギリスなどよりも早く 1861 年に組織。

しかし、彼の考え方は、「賃金は生活する最低限にしかなりえないので、労働者が賃金闘争しても無意味。普通選挙権をかちとって、労働者の政府をつくりその援助で状況を改善するのがいい」と言う「賃金鉄則」なるものを主張。

これは、「労資は協調していく」という形で、ドイツの労働運動に後々まで影響を与える。

	1840 年代から 1860 年代の動き
1848	○「共産党宣言」出版、パリ 2 月革命、ウイーン・ベルリン 3 月革命、ミラノ・ハンガリー3 月蜂起、プラハ 6 月蜂起、パリ 6 月蜂起・弾圧
1856	/クリミア戦争で英仏オスマン帝国に敗北
1861	/アレクサンドル 2 世農奴制廃止
1863	**○ドイツ：ラサール「全ドイツ労働者協会」（賃金鉄則―マルサス人口論、賃金闘争無意味）**
1864	○イギリス労働組合会議（TUC） ○第一インターナショナル（国際労働者協会）結成（マルクスの規約～1876 ﾊﾟﾘｺﾐｭｰﾝ大反動）
1867	○日本：明治維新（王政復古、地租改正、人口 3 千万人）
1868	○フランス：労働組合会議
1869	○ドイツ：社会民主労働党（アイゼナッハ派）

ラサールの主張は、マルサスという学者の「人口は幾何級数的に増えるが、食料の生産は算術的にしか増えない」という「人口論」（注）を踏まえており、たしかに、当時のヨーロッパの人口は産業革命を経て、倍々に増えていて、実感として「賃金増えなくてもしかたないなー」という説得力もあった。

(注)今は逆。穀物大資本モンサントなどが、爆発的な収量の種子を独占。食糧は、先進国では大幅な余剰で破棄。一方で飢餓人口が世界の 7 人に一人。

しかし、マルクスは、マルサスの「人口論」の嘘を徹底的に批判してきおり、ラサールの「賃金鉄則」もカンカンになって批判した。

「賃金は労働の対価ではなく、労働力という商品の価格。賃金を先に払って労働力の使用権を買って、払った以上に労働者を労働させるからこそ資本家のもうけが生まれる。食糧は足りている。資本家がもうけを搾り取って賃金を生活できる以上に払わないから食料を買えないだけ。」

こう言ったマルクスは、その後、1875 年にドイツで社会民主党が結成され、「ゴータ綱領」というラサールの考え方を受け継いだ綱領を採択したときにも「何にも分かっていない。労働者の解放の裏切りだ」と徹底的に批判する。

―ドイツ社会民主党の“折り合い主義”

この「労資協調」いいかえれば、“資本家・政府と折り合いをつける折り合い派”社会民主党は、今現在もドイツで「有力な政党」として長い伝統も誇っているが、急速な資本主義の発展に伴う労働者の増加にも支えられ、1890 年にすでに、“皇帝に認めてもらう帝国議会”で得票第 1 党。そして、第一次大戦が開戦すると、帝国議会議席第 1 党として「戦争に賛成」。

反戦を掲げた第二インターナショナルの中心でもあった社会民主党の変節にレーニンは、「許せない労働者兵士への裏切り」と批判。

ドイツの労働者・兵士はたまらず 1917 年のロシア革命に続いて、1918 年ドイツ革命を起こす。
ここでも社会民主党は、この動きに乗っかりながら、ロシアのような労働者の政府にはせず、姑息に、ブルジョアと結んだ「ワイマール共和国」成立。
労働組合のボス、レギーンは、経営者団体と「労資協調協定」を結ぶ。

こうした体制が、労働者、農民、兵士の欲求に答えられず、ナチスの台頭を許したことは周知のところ。

そして、ドイツは、第二次大戦後、日本とは異なり、「敗戦」をきちんと総括したと言われるが、社会民主党は、以上の経緯を総括したとは言えず、今、現在、鉄道労働者など独自の闘いの動きが出てきている。

	ドイツ社会民主党の動き
1875	**「社会主義労働者党（社会民主党）：ゴータ綱領（労働収益の国家援助で公正な配分）」マルクスが徹底批判**
1890	ビスマルク退任・社会主義鎮圧法失効 社会民主党―帝国議会得票第１党 労働総同盟（自由労働組合総委員会）結成
1914	6 月：第一次世界大戦、社会民主党「戦時予算に賛成」
1918	11 月「**ドイツ１１月革命**」 キール軍港水兵反乱・労働者兵士レーテ結成 皇帝ｳｲﾙﾍﾙﾑ２世亡命、社民人民評議会とレーテ執行評議会の二重権力、第一次大戦終結 **「中央労働共同体（ｼｭﾃｨﾝﾈｽ･ﾚｷﾞｰﾝ）」協定（労使協調）**
1919	1 月ドイツ共産党結成、スパルタクス団蜂起・弾圧、レーテ解散、ワイマール共和国

３．1870 年代　「パリコミューン」

この頃、ロシアでは、急速な工業化で増えた労働者の自然発生的なストライキが、頻発し始める。1870 年から 1879 年のあいだのストライキ年平均 33 回。

その一方で、社会運動としては、中途半端な農奴解放の結果、不満と窮乏に満ちた農民のためにということで、知識人による「ナロードニキ運動“人民のなかへ：ブナロード”」が組織される。

彼らの主張は、「ロシアでは、資本主義化をはかっても、広範に農村共同体が残っているので、市場は拡大せず、マルクス主義の言う労働者の革命は無理。逆に農村共同体を基盤に農民による社会主義革命」と言うもので、農村に盛んに宣伝に入ったが、農民の動きは鈍かった。

こうしたなかで、1870 年 4 月 22 日レーニンは生まれた。

―「労働者階級のためについに発見した政治形態」パリコミューン

同じ頃、マルクスが「労働者階級解放のために労働者がついに発見した政治形態」と総括し、それを受け継いだレーニンが、1917 年 10 月革命の直前に書いた「国家と革命」のなかで、あらためて、「コミューンは、労働者ができあいの国家を手に入れて自分達の目的のために使うことはできないということを証明した」とロシア革命後の労働者の国家を構想する手がかりとした、パリコミューンが起こる。

2 ヶ月の短い期間であったが、パリの大衆が打ち立てたコミューンの 4 原則は、①常備軍廃止②コミューンが立法・行政の直接民主制執行機関③官吏リコール制④官吏の俸給は労働者の賃金を上回らない、さらに、労働者による生産の管理を打ち出したことが重要。

―「戦争やめろ！」立ち上がる労働者

1870 年 7 月、皇帝ナポレオン 3 世が、無謀にビスマルクのプロイセンに仕掛けた普仏戦争で、9 月、皇帝自身を含む 20 万人もの政府軍が降伏し捕虜になったことから、9 月 4 日、戦争に嫌気したパリ労働者が立法院に押しかけて議場を占拠し帝政廃止を求めた。

議会のブルジョア共和派は、またも姑息に労働者たちが去ったその夜になって、帝政廃止を宣言。「小男の共和主義者」ティエール首班の「国防政府」成立。

翌日、第一インターナショナルは、マルクスの起草で、パリの労働者、労働組合に「呼びかけ」を発した結果、「パリ 20 区共和主義中央委員会」が結成された。同日、国防政府は、政府軍が壊滅状態でパリ防衛のために、「国民軍」をパリ全地区で募集。これが、大衆に武器を持たせ自主的組織をつくることになった。

翌年、1871 年 2 月 12 日、ティエールは、パリの労働者や国民軍志願兵を嫌い、わざわざボルドーで国民議会を開催し、ティエール“行政長官”による「臨時政府」を設立。

プロイセンとの講和予備条約を①アルザス・ロレーヌ割譲、②50 億フラン賠償金、③ドイツ軍パリ市一部占領などの条件で議会に承認させる。しかし、その賠償金の貸付融資先はフランス金融家にすること、「パリの悪党ども」の処理―武装解除することが条件になった。

さらに、反パリ政策として、国民軍兵の給与停止、パリ家賃支払い猶予措置を停止。また、プロイセンへの賠償金は農民からの税徴収でまかなう腹積もりでもあり、ブルジョアの利益を優先し、労働者・農民に敵対する姿勢をはっきりさせた。

3 月 18 日、ティエールは、「国民軍の大砲奪取」を命令。これを阻止しようとした丸腰の女性労働者を撃てという将軍の命令を政府軍兵士が拒否し将軍を射殺（この際の 2 名の射殺を含めコミューン側の捕虜の処刑は累計 64 名のみ。）。

国民軍が武装蜂起して政府軍の多くが合流。ティエール政府は、郊外のヴェルサイユへ逃亡して政府不在となった。このとき、コミューン側は城門を開け放ち追撃せず、パリコミューン開始。

―コミューンの選挙

国民軍中央委員会と 20 区共和主義中央委員会が連携して 3 月 26 日、パリ全 20 区でコミューン選挙。パリ人口 180 万人で、有権者総数 48 万に対して投票総数 23 万で投票率４７％と低く見えるが、有権者のうちブルジョアは 10 万人以上すでにパリから逃げ出していた。

選挙は、住民 2 万人あたり 1 名議員を選び 85 議席。そのうち賃労働者は 25 人、勤労者が 30 人で、広い意味で労働者は過半数を占めていた。このなかで、インターナショナル派 13 人。ブルジョアで選ばれた 16 人が早々に辞任したので、4 月に補欠選挙が行われ、インターナショナル派は 45 人まで増えた。

ちなみに、この選挙は、男子のみの選挙で、コミューンの様々な活動で活躍する女子は入っていないが、コミューンの施策として、世界で初の女性参政権を打ち出している。

また、住民の行政区単位の選挙で、ロシア革命における工場、兵隊、農村単位で選出したソビエト(評議会)の代表のように、“いつも同じ職場でよく知る人物を選出し、だからこそ、社会階層を明確に反映して選出された代表は、同僚の委任に答えてよく現場の状況を踏まえた行動をする。選出した方は、代表者を最後まで支える、あるいは不足ならリコールするという「民意」を反映させる行動を通じて、直接民主制に近い成果を実現する”その粘り強さには欠ける面があった。

—コミューンの画期的な施策の数々

体制を整えたコミューンは次々と毎日のように画期的な施策を打ち出す。
フランス革命以来、たえず労働者の力が体制を変えたが、そのたびにブルジョアに裏切られてきた歴史。そのなかで蓄積した知恵が噴出した感じ。

まず、すでにあった志願制の国民軍に依拠し、民衆が必要なかぎりで自ら武装することで、徴兵制と常備軍廃止する。
これは盛んになりつつある帝国主義で他国に戦争をしかけることをやめ、また、王政であれ、共和政であれ、戦争と軍備に大半を使っていた「近代国家」の予算を大衆のために使う宣言でもあった。
事実、このおかげで、戦争寡婦や遺児の年金、無料教育の予算が捻出できた。

また、コミューンの吏員・議員の報酬が労働者の報酬を越えないだけでなく、寡婦の年金と同額の 6000 フランであるのは、まさに、政治・行政を大衆のために行うのだという宣言。

その意味で、庶民の生活に配慮した質屋の質札の無償解除、家賃の支払猶予。
さらには、負債支払い猶予は、中産階級（小売店主・手工業者・商人）の債権者

の債務者への横暴の問題を解決し、労働者中心のコミューンが中産階級の大多数の圧倒的支持も受けることになった。

	コミューンの施策
3 月 29 日	徴兵制と常備軍廃止 家賃に関する布告（70 年 10 月・71 年 1 月および 4 月までの家賃支払い猶予）質屋の質物売却禁止（庶民の借金返済猶予）
3 月 31 日	外国人の参加宣言「コミューン旗は世界共和国の旗」（ex 労働大臣ポーランド人労働者）
4 月 1 日	コミューンの吏員の俸給、議員の俸給は 6000 ﾌﾗﾝを越えない決定
4 月 2 日	教会と国家の分離、宗教目的の国家支出の廃止と教会財産の国有化、教育の無料開放
4 月 6 日	ギロチン台を焼き払う
4 月 8 日	宗教的なものを学校から追放する命令
4 月 10 日	寡婦および遺児のための布告（戦死した国民軍兵士の妻に年金 6000 ﾌﾗﾝ、遺児に 18 歳まで年金 365 ﾌﾗﾝ、母がいない遺児はコミューンで養育）
4 月 12 日	ヴァンドーム広場戦勝記念碑（ナポレオン像）引き倒し
4 月 16 日	工場主が放棄した工場を労働者の生産協同組合に引渡し（工場の統計表と財産目録の作成と補償金支払いが条件）、生産協同組合の連合体組織計画立案の命令
4 月 17 日	負債支払い猶予に関する布告（約束手形・小切手等、7 月 15 日から 3 年以内の履行、負債の利子は無利子）—
4 月 19 日	「フランス人民への宣言」（「コミューンは徹頭徹尾開放的な体制」マルクス）
4 月 20 日	パン焼き職人の夜間労働廃止。警察関係業者が独占していた職業紹介所を区役所に移管。
4 月 26 日	司法吏員（公証人・執達吏・競売人・執行吏他）は労働者並み固定給のコミューン吏員。 医学校教授たちの逃亡により「自由な大学設立委員会」任命。
4 月 27 日	工場主の私的裁判権の罰則付き禁止（工場主の判断で労働者に罰金を科し賃金減額慣行）
5 月 6 日	5 月 20 日以降、質札の無償解除（71 年 4 月 23 日以前の金額 20 フランを超えない質札。小額借金の棒引き）
5 月 12 日	コミューン行政官庁の入札見積書に労働者の最低賃金を明記することを義務付け（低額入札のための飢餓賃金是正＝賃金保証）

こうしてコミューンは、「パリコミューンの死体公示所に身元不明死体はなく、夜盗もなく、強盗もなく、1948 年 2 月以来、はじめてパリの街路は、いかなる警察もなしに安全になった。」その上で「労働者階級が社会を先導することができる唯一の階級であることが中産階級によってさえも公然と認められたはじめての革命」(マルクス)となった。

そして、インターナショナル、労働組合会議、の提言もあり、労働者の政府としての施策。

① 工場主が放棄した工場を労働者の生産協同組合に引渡し（工場の統計表と財産目録の作成と補償金支払いが条件)、生産協同組合の連合体組織計画立案の命令
② パン焼き職人の夜間労働廃止。警察関係業者が独占していた職業紹介所を区役所に移管。
③ 工場主の私的裁判権の罰則付き禁止（工場主の判断で労働者に罰金を科し賃金減額慣行）
④ コミューン行政官庁の入札見積書に労働者の最低賃金を明記することを義務付け（低額入札のための飢餓賃金是正＝賃金保証）

マルクスは総括する。「コミューンの真の秘密はこうであった。コミューンは本質的に労働者階級の政府であり、横領者階級に対する生産者階級の闘争の所産であり、労働者階級の経済的解放を実現するための、ついに発見された政治形態であった。」

―コミューン、労働者の動力が歴史をつくる

パリコミューンの労働者の状況は、パリ人口 180 万人。そのうち、57%が小規模工業労働者、12%が商業労働者。労働組合数は 100 で、機械工 3 万人うち 40%、青銅工 1 万人うち 60%、印刷工 3500 人うち 69%が加入。生産・消費協同組合数は 54 万人で「労働組合会議（第一インター指導)」を組織。

ちなみに、コミューン壊滅で逮捕された 3 万人の統計として、読み書きできる識字率は 31.2%。たくさん出されたコミューンの布告を読めないものも多いなか、みんなで声を出して読み上げている様子が浮かぶ。

1871 年 3 月 29 日のコミューンの布告

そして、コミューンは、世界の労働者に謳い継がれる歌「インターナショナル」を残した。

この歌詞の作者は、コミューンの評議員で詩人のウジェーヌ・ポティエ。彼は布地図案デザイナーでプリント布地会社経営。布地業者組合をつくり第一インターに加盟した。彼もむろんバリケードのうえで闘った。

コミューンが敗れ、同志たちが「連盟兵（フェデレ）の壁」で虐殺された後、なおもヴェルサイユ軍の弾圧がつづいた６月、 ポティエは、まだ戦火にくすぶるパリの街なかに身をひそめてこの歌を書いた。彼は、この偉大な希望の歌をもって、戦士たちに呼びかけ、はげました。

なお、「インタナーナショナル」の曲が、音楽家ピエル・ドゥジェイテールによって作曲されたのは、1888 年で、ポティエが死んだ翌年だった。

―コミューンと農民

成立から１ヶ月、コミューンの統治が機能しているのを見て、ティエールは、国民議会で成立させた新地方自治法を使って、4 月 30 日に全国市町村議会選挙を行う。

コミューンに対抗して、地方の農民の支持を取り付けようとしたのだが、ティエール派惨敗（市町村議員数 70 万人のうちティエール派 8 千人で地方の支持なし）。

7 つの都市でコミューンが短期間でき、パリコミューンは、巡回隊を組織してパリコミューンの施策を宣伝するために農村に派遣し、ティエールの徴税強化に怒っている農村の評価は好意的だったが、如何せん 2 ヶ月という期間では、それ以上全国で施策を具体化するには時間がなかった。

「農民の解放をプロレタリアが担う仕事」をパリコミューンは目指しながら届かなかった。日本では農民がその解放を天皇に託す形となった。そして、ロシアでは、その仕事をついに実現した。

インタナショナル

ウジェーヌ・ポティエ
大島 博光 訳

さあ　最後の　たたかいだ
おれたちは集まろう――明日
インタナショナルは
人類のものとなるだろう

立て！　この世の　地獄におちた者たち！
立ち上がれ！　飢えはてた徒刑囚たち！
理性は　火口の中で　怒りとどろく
いまこそ　最後の噴火だ　爆発だ
古い過去をぶちこわし　投げ捨てよう

立て！　立ち上れ！　奴隷のむれよ
世界は　根もとから変るのだ
無一文のおれたちが　すべてを握るのだ

神も皇帝も　あの三百代言も
けっして　おれたちを　救ってはくれぬ
生産者よ　おれたちは　自らを救おう
共同の救いを　要求し　かちとろう
泥棒どもに　盗んだものを吐き出させ
牢獄から　指導者をすくい出すため
おれたちの鍛冶場のふいごに風を送ろう
熱いうちに　鉄を　鍛えあげよう

国家が抑えつけ　法律がいんちきをする
税金が　貧乏人の血と汗を絞りとるのに
金持らには　なんの義務も　課せられぬ
貧乏人の権利とは　絵に描いた餅だ
圧制に苦しむのは　もうたくさんだ
平等は　ほかの法律を　要求するのだ
平等は言う　「義務のない権利などはない
仲間たちよ　権利のない義務などはない」と

醜悪を重ねて　成り上がり　のし上がり
いまはときめく　鉱山王や　鉄道王ども
かれらは　ひとの労働を盗みとるほか
いったいいままで　何をしたというのか
このいんちきな一味の　金庫の中に
労働が働き出した成果は　消えてしまった
それを返せと　人民が要求したとて
当然　受けとるべきものを要求したにすぎぬ

王公どもはおれたちに　煙りを食わせた
おれたちは手を組んで　暴君どもと闘おう
軍隊の中でも　ストライキをおっ始めよう
鉄砲を逆さにかついで　隊列を乱してやろう
あの血も涙もない将軍どもが　倦くまでも
おれたちを英雄に　仕立てようとするなら
いまに知るがいい　おれたちの銃口が
その将軍どもにこそ　向けられているのを

労働者たちよ　農民たちよ　おれたちは
おんなじ働く者同志の　偉大な党だ
大地は　耕して働く　人民のものだ
働かぬのらくら者は　よそへ行くがいい
そうすれば　みんながたらふく食える

もしも　あの鴉ども　禿鷹どもの類が
ある朝　この世から消えてなくなれば
この世にゃ　いつも　太陽が輝くだろう

さあ　最後の　たたかいだ
おれたちは集まろう――明日
インタナショナルは
人類のものとなるだろう

現在もパリ市内に残る追悼碑「連盟兵の壁」

４．1880 年代　「8 時間労働制」

―ロシアの経済高度成長と初の労働組合結成

1880 年から 1890 年のあいだにロシアの工業は、鉄道距離は 20 倍、石油の採掘量は 140 倍となり、高度成長し産業革命が完成する。
それでも工業生産高は国民経済のまだ 3 割。

この急速な発展をするために、外国から資本を導入したため、重工業はほぼ外国金融資本（英仏ベルギー）に従属。いいかえれば、ロシアのブルジョアは、ほとんど「雇われマダム」で、独自のブルジョアとしての強さはない。

それに比べれば、明治維新以来の日本は、「和魂洋才」。西洋の技術を取り入れながら、日本人のブルジョアとその支配体制を作っていったといえる。

一方、ロシア労働者のストライキは、70 年代以降、農村を基盤とするといっていたナロードニキも労働者のデモを組織するなど、さらに増加。
1872 年、皇帝も工場主の私設警察逮捕権を定めていた警察条例を破棄。

そのなかで、1875 年にはロシアとして初めての労働組合「南ロシア労働者同盟」、1878 年には「ロシア労働者北部同盟」が結成される。しかし、労働組合結成は依然として非合法で、いずれの労働組合も数ヶ月で弾圧され解体する。

―世界では「8 時間労働制」の闘いとメーデー開始

資本主義の母国イギリスの経済が 1873 年の大不況以降低迷するなか、追い上げていたドイツ、アメリカが急速に発展する。

特に、アメリカは、もともと皇帝などがいなくて、「自由」を求めてヨーロッパから、この時期、4 千万人にものぼる大量の移民の流入があったこともあり、西部への鉄道、石油・金鉱採掘など格段の資本主義の発展を遂げる。

労働運動も盛んになり、労働者は「1 日 24 時間。寝るのに 8 時間、自分の時間 8 時間、資本家のための労働は 8 時間、1/3 ずつで当たり前だろう！」と 8 時間労働制を求めた。

1886 年、比較的穏健な熟練労働者の労働組合がアメリカ労働総同盟（AFL）を結成。一方、急激に増加してきた非熟練労働者を中心にストライキが増加。

1886 年 5 月 1 日には、シカゴのヘイマーケットで、収穫機会社マコーミックの労働者が「8 時間労働」を求めてストライキ。警察が労働者 4 名を射殺。これを契機にシカゴ全体、さらに全国で 38 万人が参加するゼネストに拡大。

1889 年には、こうした動きを踏まえて、パリコミューン後、「インターナショナル禁止法」など弾圧強化で 1876 年に解体した第一インターナショナルを第二インターナショナルとして、パリで、ドイツ社会民主党などを中心に再建。これが掲げたのも「8 時間労働制」の実現だった。翌年 1890 年、ヘイマーケット事件を記念し、5 月 1 日に各国で 8 時間労働制を要求するメーデーが開始。

―ロシア革命でやっと実現した「8 時間労働制」と日本

この 8 時間労働制の闘いは、ロシア革命後 1917 年のソビエト憲法でやっと実現する。そして、第一次大戦戦後処理を決めたパリ講和会議で、ロシア革命を恐れたブルジョアが譲歩し、世界労働機構（ILO）が設立され、その第 1 号条約が 8 時間労働制となる。

しかし、第一次大戦戦勝国のひとつだった日本は、「直前に 12 時間労働制を決めたばかりだ」と主張し、「特例国扱い」となり、今現在まで、アメリカとともにこの条約を批准していない。

そして、今、自民党アベ政権が、「残業代ゼロ法」を導入し、労働者の長年の闘いで勝ち取られたこの歴史的な「8 時間労働制」を壊そうとしている。

1886 年 5 月 1 日のヘイマーケット事件の記念碑＠シカゴヘイマーケット広場

５．1890 年代　「政治スト」

―ロシアの労働運動の発展「政治スト」

1895 年、25 歳のレーニンが労働運動に参加。同時に、労働運動とともにマルクスの考え方を基本に社会主義運動をすすめるために、マルトフなど仲間数人と首都ペテルブルグで「労働者階級解放闘争同盟（非合法）」を結成する。

この「同盟」の当初設立メンバーは、12 月には全員逮捕され、1897 年から 1900 年まで、シベリアに流刑となるが、残った同盟員の指導もあり、1896 年にペテルブルグで、3 万人の紡績労働者のストが起きる。

全国では、1891 年から 1894 年、ストライキ平均年 50 件。1895 年から 1899 年ではスト参加 40 万人超（1880 年代前半の倍）と労働者が闘い続けていた。

この結果として、1897 年には労働日制限法、1898 年には、欧米の闘いよりは遅れているが、労働時間 11 時間半と日曜祝祭日を休暇とする「新工場法」を皇帝に決めさせた。

当時の労働者の状況は、工場労働者 300 万人で、高度成長で倍増した総人口 1 億 25 百万人のわずか２％。

しかし、そのうち大企業に 7 割、ペテルブルグ・モスクワ・キエフなどの大都市に 8 割が集中していた。

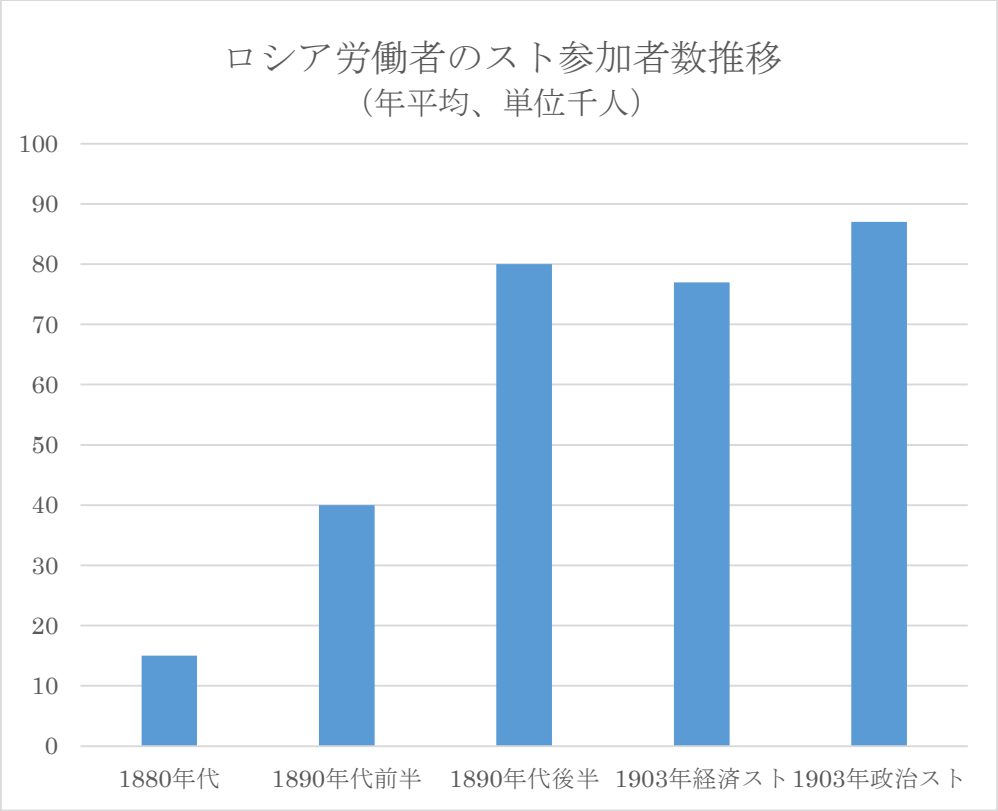
雇用労働者数でも 1 千万人で総人口のわずか８％。農奴出身が 9 割を占めていた。残り 8 割は農業人口。

1903 年には、専制打倒など政治的要求を掲げる政治ストが労働条件改善を求める経済ストを上回る（政治スト：経済スト＝53：47）。

ロシアの労働運動の特徴は、「欧米でまれな“政治スト”」。

この理由として、トロツキーは「大都市の大企業に労働者の多くが集中していること、国家の抑圧が強烈であること、急激な工業化で農村から出てきた労働者の大半が若く衝動性が強いこと」を挙げている。

「労働者階級解放闘争同盟」設立（前列右端マルトフ、その隣レーニン）



ちなみに、当時のロシア国民の読み書きできる識字率は 2 割でパリコミューンより低く、ロシア革命後の 1920 年でも３２％。

ストライキは非合法で、工場ごとに「ストライキ委員会」をなんとか組織し、これが闘う労働組合の原型となったが、闘うのに「文字」はそんなにいらなかった。

その一方、日本の識字率は、明治維新の前から見れば、幕末に、全国で寺子屋数が 15,560 あり、1880 年から 90 年にはすでに男で 50～60%、女で 30%。1920 年には徴兵検査の結果だが、20 歳男子で 97%。

この背景には、1895 年日清戦争に勝利し、その賠償金で学校教育を充実させ、韓国を併合した 1910 年には尋常小学校就学率 100%になったことがある。

第二次大戦前の日本で「革命」がおきなかったことの一つの理由に、こうした学校教育をベースとした識字率向上と裏腹に、「教育勅語」教育などを通じて、「天皇制維持・富国強兵」など体制のイデオロギーを徹底させたことも大きい。

６．20 世紀初頭　「党」

―「労働者の党」とは何か？

こうした労働者の運動の発展を受けて、1898 年 3 月、レーニンたちが、シベリア流刑になっている間に、レーニンの師であり、ロシアへのマルクス主義導入の先駆者プレハーノフなどを中心に、ドイツに 20 年遅れて、ロシアで初めての社会主義政党として「ロシア社会民主労働党」が創設される。

しかし、この会議の参加者 9 人のうち 8 人が、会議終了後すぐ逮捕される。

その一方、逮捕されずに活動を続ける若手の社会主義者たち「青年組」が、1899 年に「団結精神と政治意識の高い職工に支えられた西欧の運動とちがい、ロシアの労働者は若く団結すること自体に未熟。党は社会主義や政治を労働者に無理に持ち込まないで、彼らの経済闘争とともに歩むべき。」と“経済闘争市場主義”を主張する「クレード（信条）」を発表する。

—「極悪人？」レーニンの「何をなすべきか」

これに対して、直ちに、29 歳のレーニンはシベリア流刑の地から、流刑者 17 人の「老人組」を代表して「抗議」を送り、さらに第一回の政治亡命として移ったスイスから事態の推移をじっと眺めて、1902 年に、「なにをなすべきか」という著作を書いて論争を続ける。

この「なにをなすべきか」という論文は、「国家と革命」とならんで有名な論文であるが、ソ連を批判する論者などから、スターリンなどという独裁者を生み出すことにもなったモトだとも言われているモノ。

それは、「労働者はほっとけば賃上げ闘争しかしなくて革命などする気にはならないので、インテリの党が労働者と労働組合の上にたって、革命思想を外部から注入し、リードしていかなくてはならないのだ」と、まったく労働者を馬鹿にしているレーニンは「極悪人」と言う評価。

しかし、当時の労働者の運動の状況も踏まえて、あらためて、この論文を見てみると、レーニンは、労働者を馬鹿にしているというより、逆に、自然発生的にどんどん闘いを広げる労働者に対して、社会主義者が立ち遅れており、もっと努力して労働者に信頼されるようになれ、と言っている。

「1901 年メーデーにハリコフで労働者が立ち上がったときも彼らは“専制打倒”をスローガンにしている。全国でもいわゆる政治ストが経済ストを上回っている。そういう労働者の闘いで皇帝も警察あがりに労働組合（ズバトフ互助会）をつくらせて、一部労働組合を合法にせざるを得なくなっている。」

「彼らは、君達が言うように、若くて未熟だから、身近な賃金のことしか興味がないとか、専制の抑圧に恐怖し弱いわけでもない。むしろ、政治意識があり、もっと、自分の工場だけではわからない、情報と指針を求めている。」

「だから、専制の抑圧について全面的な政治的暴露をする必要がある。そもそも、政治的抑圧はすべての社会階級にのしかかっており、職業的・一般市民的・個人的・家庭的・宗教的・学問的等々の生活と活動のさまざまな分野に現れている。労働者が学生と農民と市民とつながって闘っていけるように、これを仕事としなくて何が仕事なのか？」

「そういう大衆の抑圧に対する興奮の水流と細流をことごとく寄せ集め、集中する能力が我々にまだないことが問題」

—党がなすべきこと“革命のリアリティを充満させる“

つまり、レーニンには、革命は、“おこす”のではなく、大衆の「抑圧はいやだ」というエネルギー、“すでにある革命のリアリティーをこの社会に充満させること”という考えがあった。

だから、1901 年に結成されたナロードニキの流れを汲む「社会革命党」を挙げて、「暗殺とかで政府を直接攻撃するための組織なら社会革命党でいい。われわれの任務はちがう」と言う。

そして、1903 年に、社会民主労働党第 2 回大会がロンドンで 42 人の参加で開かれ、党の加入条件をめぐって、「党の活動に参加する」ことを条件にするレーニンたちの「ボルシェビキ（多数派）」と「党の政策を承認するだけでいい」とするマルトフなどの「メンシェビキ（少数派）」に分裂する。

レーニンは、反対者を大会にできるだけ招待しないで、初回投票で負けても議論を続け、嫌気した数人が退場した後、再投票でやっと勝つ（28 票：22 票）。

彼は、姑息な手法を使ってでも、自分の主張に固執し、分裂を辞さなかった。

それは、“労働者の利益を代表するだけの大衆政党を目指すならば、わざわざ分裂させる必要はない。しかし、我々が目指すのは、労働者と大衆からすでに滴っている革命のリアリティを充満させる能力と活動を任務とする党ではないのか”という想いであったと思われる。

それから 2 年、多くの社会主義者の「不意をついて」、1905 年の「ロシア第一革命」が起こる。その時、レーニン 35 歳。（次回につづく）

映画「グッドバイ！レーニン」（２００２年）
ベルリンの壁崩壊後の東ベルリンで
昏睡状態から覚めた母親が
運び去られるレーニン像を目撃する場面

：映画「グッバイ、レーニン」は、一般に「社会主義の崩壊をコミカルに描いた」とされるが、実は、そのメタメッセージとは、「レーニンは生きた、レーニンは生きている、レーニンは生き続ける」にほかならない。
これが言いすぎならば、レーニンに別れを告げたことによって、逆に、人々はレーニンの名によって語られるような何かにふたたび出会わざるを得ないような状況に投げ込まれつつあるということではないのか。
―白井聡「未完のレーニン」

2015 年 4 月 26 日プチ労その６０

第二回　1905 年の革命

第一回「前史」: ソビエトのモデル「パリコミューン」と「8 時間労働制の闘い」を中心とした欧米労働者の盛んな闘いの歴史を追いかけながら、急速な工業化と皇帝の抑圧のロシアでは、20 世紀初頭、欧米でもまれな労働者の「政治スト」が盛り上がり、未だ方向性を見出しえない多数の農民とともに、「革命への圧力」が強まっていた。その状況を前に、1903 年、レーニンたちの党は、「革命の党とは何か」をめぐって分裂した。

1.　「血の日曜日」

1904 年 2 月日露戦争が勃発した。急速な高度成長に伴う労働条件の悪化と戦争への動員に対して、労働者の抵抗は続き、12 月には、バクーの石油採掘労働者のストライキが勝利し、初の団体協約を結んだ。

さらに、年末、3 万人の労働者が働くロシア最大の重機械工場、首都ペテルブルグのプチロフ工場で 4 人の労働者が解雇され、その解雇撤回を求めて、年明け 1905 年 1 月 3 日からストライキが始まる。

プチロフ工場のストライキが、7 日には、ペテルブルグ 382 工場 10 万人のゼネラルストライキに広がる。
そして、9 日には「血の日曜日」を迎える。

4 年前に一部合法化された労働者団体のうち「労働者協会」の呼びかけで、その指導者、社会革命党の神父ガボンを先頭に 15 万人が、皇帝に対する平和的な請願行進を行った。しかし、皇帝は軍隊により無差別に銃撃させ、千人以上の死者、2 千人以上の負傷者を出した。

皇帝の前で読み上げるはずだった請願書は、「我々は専制で窒息している。雇主は、我々が生きていくことが苦しみでなくするよう待遇改善を求めてもすべて拒絶する。我々には何の人権もなく、皇帝の官吏は我々を奴隷にしている。」ではじまる。

そして、「労働者法的保護・8 時間労働・戦争中止・憲法制定」を求め、「陛下の人民をお救い下さい」と結ばれていた。

無差別な虐殺の翌日、ゼネラルストライキは全国に広がり、ストライキ参加者は、いままで 10 年間のスト参加者累計と同じ 44 万人に及んだ。

血の日曜日

請願行進の指導者神父ガボン：社会革命党員。
1906 年、「警察スパイ」の理由で社会革命党により絞首刑
レーニンは、「血の日曜日」の数週間後、逃亡してきたガボンの「全ての土地を人民へ」というスローガンに感心し長時間話し込んだ。

2.　革命を担うプロレタリアと労働組合

―合法的労働運動は社会主義運動の新しいより広い基盤

この動きは、社会主義者が積極的に指導したわけではなかった。しかし、レーニンは亡命の地スイスでこのニュースを聞いて 2 日後、彼らの新聞「フペリョード（前進)」に感激して書いた。

「労働運動の最も偉大な出来事だ。合法的な労働者協会は警察の配慮を受けていたが、次第にその矛先を専制に向け、プロレタリアの階級闘争の爆発になりつつある。」

そして、「合法化は、社会主義者がなかなかふるいたたせられないような人たちを運動に引き入れるだろう。一旦、運動に入った労働者はさらに前進するだろう。だから、合法的労働運動は社会主義運動の新しいより広い基盤になるだろう。」
彼が、労働組合をあらためて見直した瞬間だった。

―プロレタリアがブルジョア革命を担える

2 年前分裂した社会民主労働党のうち、レーニンたち「ボルシェビキ」は、「血の日曜日」の 3 ヶ月後、4 月にロンドンで第 3 回大会を開く。

そこで、「血の日曜日の請願項目は、ほぼ 1792 年のフランス革命で実現済みの内容であり、この革命はブルジョア民主主義革命だ。しかし、闘争の動力はプロレタリアで、プロレタリアが、この革命の指導権を獲得し、最後まで遂行する。農民と同盟し、武装蜂起し臨時革命政府を樹立し、ツアー政府を打倒する。」方針を決めた。

これに対して、マルトフたちの「メンシェビキ」は、同じ 4 月にジュネーブで協議会を開き、「ブルジョアが改革に尻込みしないように、プロレタリアートは、この革命には参加せず、労組の経済闘争の発展が党の主要任務とする。」と決議。

その上で、「専制打倒などの政治任務を党の主要任務とするのは、“憎むべき革命的狭隘性”」とした。

レーニンはこれを「日和見主義」として徹底的に批判。
「血の日曜日」の請願書の冒頭にもあるように「今、大衆は、専制の圧力で窒息し、資本主義の発展の“不足”で苦しんでいる。一方、ブルジョアは、労働者の運動の爆発をおそれ、専制の抑圧を完全に取り除くよりも、一部は専制の力を借りて抑えようとする。」

「だから、この民主主義革命は、ブルジョアよりもプロレタリアートに極度に有利で、無条件に必要なもの。中途半端に解放され貧困に喘ぐ農民もリードして、プロレタリアートこそがこの革命を徹底的に首尾一貫して担えることがどうしてわからないのか。」

—“革命政府の萌芽”ソビエト。その基本的力は労働組合

5 月になると、「専制打倒」を掲げた政治ストが全国でさらに広がる。
一方で、各地で、労働者は、ロシア語で「会議、協議会」と言う意味のソビエトを自分たちの代表組織として創造した。

最初のソビエトは、イヴァノヴォ・ソビエト（ロシアの繊維工業の中心都市）で結成されたが、「ゼネラルストライキから、このストライキをきっかけとして、このストライキのために生まれた。」（レーニン）

労働者代表ソビエトは、主要都市で結成され、9 月には、トロツキーがペテルブルグソビエトの副議長になる。彼によれば、

「未曾有の革命的積極性をとっさに発揮することを求められたプロレタリアートは、戦いの規模と課題の壮大さに即応する組織をいかなる犠牲を払ってでも、自分たちの胎内から生み出さなければならなかった。」

ストライキから生まれた労働組合は工場を、ゼネラルストライキから生まれたソビエトは、労組と住民の代表により都市と地域を担った。レーニンは、「ソビエトは戦闘的な組織で、すべての革命勢力を統合できる“革命政府の萌芽”。その基本的力は労働組合」とした。

そして、レーニンたちは、ソビエトの動力としても、労働組合の建設と合法化に取り掛かり、8 月から 10 月の間に、ペテルブルグで 40 組合、モスクワで 50 組合、オデッサで 30 組合が立ち上がった。

3.　戦艦ポチョムキンの反乱

—労働者 Striker⇒農民蜂起⇒兵士の反乱

この時期の経済的ストと政治的ストは独特に絡みあっていた。
レーニンは言う。「工場の賃労働者が直接・即時の改善を資本家から勝ち取った実例を、広範な大衆が毎日目の当たりに見て、新しい精神がロシアの全大衆に入り込んだ。農奴的な信心深い従順なロシアは、本当に生まれ変わった。」

1905 年初頭に全国でストライキの最初の大波が起こると共に、春には、最初の大農民運動が目覚めた。

「“罷業者＝Striker”という言葉は、農民の間で新しい意味を持つようになった。以前は“学生”という言葉で表された反逆者や革命家と同じ意味に。”学生“はよそものであったが、”罷業者＝Striker”は仲間だった。農村にも彼らと打ち解けて話す若い農民が現れた。」

「この始まったばかりの農民運動と都市のプロレタリアの大衆ストライキとが結合しただけで、専制の最も"強固な“支柱、最後の支柱を動揺させるのに十分だった。海軍にも陸軍にも兵士の反乱が始まった。」

—腐った牛肉に怒る水兵

6 月, ロシア黒海艦隊に所属する戦艦ポチョムキン艦上において、乗組員の食事用の肉にウジ虫が湧いていたことをきっかけに反乱が発生。

ポチョムキンの水兵たちは、艦を制圧し、「市民の自由」と「土地をよこせ」をスローガンにしたオデッサ市民・農民と連帯し、オデッサの階段で暴虐な弾圧を加える皇帝の軍隊と対峙する。

＊右写真は、1905 年の革命の 20 周年記念として、ロシアアヴァンギャルドの一翼を担うエイゼンシュタイン監督が製作した無声映画の名作「戦艦ポチョムキン」から。

腐った牛肉に怒る水兵たち

オデッサの階段の虐殺

4.　第一次ブルジョア革命

—10 月勅令

ぐらついた皇帝とその体制は、日露戦争に破れ、9 月にポーツマス条約を結ぶ。一方、全国で政治ゼネストは、10 月に入り、工場労働者だけでも参加者 50 万人と膨れ上がり、皇帝はやむなく、10 月勅令を発し、「ドゥーマ（国会）開設、言論・結社の自由、憲法制定」を約束する。

これは、自由主義ブルジョアに歓迎され、レーニンも「逮捕の危険が減った」と 11 月に帰国する。

その 11 月には、「土地をよこせ、小作料下げろ、作男賃上げしろ」を掲げた農村騒乱が頂点となり、全国郡の１/３にも達した。

これらの動きは、欧米にも影響し、ドイツでは、非熟練工の組合員が急増し、労働組合員数が 134 万人にもなり、この頃、ストライキは 2300 回、50 万人に参加者となった。また、アメリカでも、非熟練工の増加にともない、世界産業労働組合(IWW)が結成された。

—モスクワ蜂起失敗

しかし、10 月勅令で譲歩し、それで満足した自由主義ブルジョアを味方に付け直した専制の労働運動への弾圧は次第に強まり、12 月 3 日には、武装蜂起を計画していたペテルブルグソビエトが解体される。トロツキーは逮捕、シベリア流刑護送中に脱走し、ウイーンに亡命。

ペテルブルグに代わり、7 日に、モスクワソビエトが、全国でゼネストを続ける鉄道労組等と 10 月勅令の「憲法制定」などの約束を履行しない専制に怒る大衆に支えられ、15 万人で「専制打倒」に武装蜂起。

しかし、9 日間の市街戦の末、結局、「土地を」というスローガンが明確でないことなど、農民出身が多い兵士が合流せず、また、他の都市での蜂起も連動せず、政府軍に破れ失敗する。
これが、1905 年革命の「頂点」となった。

「市民の自由」を喜ぶ中産階級

—ムチとアメ

その後、専制の弾圧は苛烈を極め、急速に建設された労働組合は、1906年から1912年のあいだに、閉鎖に追い込まれた組合600、起訴された組合700、指導者の逮捕は900人に及んだ。また、1908年から1910年の2年間で、28千人が処罰され、5千人が死刑になった。
レーニンは、逮捕を何とかのがれ、1906年8月再度亡命した。

一方、中途半端な農奴解放の結果、当時、ロシア総有用土地3億haのうち50%が共同体分与地、20%皇室、残り30%が大地主3万人の所有のままだった。

この状況を踏まえて、「土地をよこせ」という農民に対して、1906年11月新土地法が定められ、「土地私有制」「農民の土地売買自由化」がされた。

新土地法で250万農家が6%の土地を私有した。しかし、一部の富裕農民に対して、分与地を売却しプロレタリア化した農民が500万。さらに零細分与地にしがみつく多数の零細農民が生まれた。

—ストルイピンのクーデター、第一次ブルジョア革命終了

1907年6月には、宰相ストルイピンが、「6.3クーデター」を起こし、国会を解散し、社会民主労働党議員を逮捕し、選挙制度を再び大地主中心に改悪して、第一次ブルジョア革命に終止符を打った。「専制は多少の肋骨を失いながらも、強くなり試練をくぐりぬけた。」(トロツキー)

5.　党と労働組合

―政治に関わるな！労働組合の「中立」

ドイツでは、労組指導者が、足元の非熟練工の闘争の激しさと 12 月のモスクワ武装蜂起と敗北に肝をつぶした。

もともと、労働組合が社会民主党よりも 20 年も早くできて党より強く、熟練工の労働者を中心に資本との″折り合い主義“をとってきた。さらに、党に対して「干渉するな。」と、政治闘争に反対し、「労働組合の中立」を主張。

ロシアの「メンシェビキ」も、専制の苛烈な弾圧を恐れ、その指導者プレハーノフは、「専制に対して、労働組合はまだ弱く、そこで、無理して社会主義思想を導入すると反対に行ってしまう」と「労働組合の党からの中立」を主張し始める。

そして、1906 年 4 月に「ボルシェビキ」と「メンシェビキ」の統一の大会として、ストックホルムで開かれた社会民主労働党第 4 回大会で、「メンシェビキ」代議員が多く、「無党派労働組合賛成」決議が通る。

ー党と労働組合

労働組合を革命の基本的な動力と見ていたレーニンは、これらの動きにあらためて、「日和見主義」として、猛然と反撃する。

「労働組合は、幅広く労働者が加入し、執行部の選挙も通じて、プロレタリアートの意志が確認できる組織。革命の動力として、労組への党の指導は堅持する。」

「労働者の状態の改善のため、労働者を広く統合するために、中立性が必要だというが、階級の矛盾が激化して、様々な政治的意見の相違が労働組合にもすでに持ち込まれており、その議論がプロレタリア解放のために喫緊の課題。」

「ただし、中立性と自主性は違う。党の指導というのは、長期の困難な

啓発・教育によるもの。労組の独自性を尊重し、党派のレッテルを貼ったり、党の綱領を押し付けたり、党の下部組織になるよう強制してはならない。」

そして、1907 年 6 月、ロシア社会民主労働党の第 5 回大会がロンドンで開かれたとき、今度は、「メンシェビキ」を「ボルシェビキ」が上回っており、「労組への党の指導の堅持」を決議した。

さらに、8 月に、シュツットガルドで開かれた第二インターナショナル第 7 回大会でも議論し、「労働組合と党との真摯な相互関係」という決議を勝ち取る。

その上で、1912 年 1 月に、12 人の少数だったので協議会だが、プラハで開かれた社会民主労働党の第 6 回協議会では、「労働組合中立を主張するのは、党をなくそうとしているのと同じ」だとして、プレハーノフたちを除名する。

—アナルコ・サンディカリズム（無政府組合主義）

一方、ドイツと同じく、労働組合が党よりも 20 年早くできているフランスでは、このころ「無政府組合主義」が宣言された。

1906 年、アミアンで開かれたフランス労働総同盟の大会で「アミアン憲章」が採択された。その内容は、①労組が労働者階級の唯一の組織であること、②プロレタリアの党やプロレタリアの独裁は必要ない、③労組のゼネストと武装蜂起で資本主義制度をくつがえす、④その後労組による社会の生産、分配、管理を行う。

レーニンは、これに対しては、「この無政府組合主義は、上層の労働者が資本家と協調するなかで、取り残された中下層労働者の支持で潮流となった。労組の団結で断固資本主義を転覆する姿勢など、ここから学ぶべきもの多くある。」

その上で、「結局、国家をどうしていくか考えないので、ブルジョアの付属物にしかならない。ロシアでも“蔓延”しつつあるが、党として、”生気あるもの“を取り込んでとり戻さねばならない。」

6.　「革命の敗北」

—なぜ革命は敗北したか

レーニンは言う。「労働者代表ソビエトは多くの都市で新しい国家権力として実際に機能していた。残念なことに、この時期はあまりにも短く、まだ孤立的だった。」

「農民運動は大規模なものになった。残念なことに、農民が破壊したのは貴族屋敷総数の 15 分の一に過ぎなかった。また、農民の行動はあまりにもばらばらで、非組織的で、非攻撃的だった。」

「大衆の革命的動揺は兵士をもとらえた。反乱の中心は、軍服を着た労働者と農民で、運動ははじめて人民的になったので、勤労大衆の大多数を捉えた。」

「欠けていたのは、一方では、大衆の堅忍と決断。他方では、軍服を着た革命的社会民主主義的労働者の組織だった。彼らは。革命的軍隊の先頭に立ち、政府権力に対する攻撃に移ることをあまりにも理解していなかった。」

トロツキーは言う。「革命勢力はいずれもそのときはじめて立ち上がったのであり、経験もなければ決断力も不足していた。」

「専制をぐらつかせるだけでは不十分で、さらにくつがえさなければならないと明らかになったまさにその時に、自由主義者は革命に背を向け、ブルジョアが民衆と急激に断絶した。」

—「敗北」の反響　労働者の「意識」

当時の現場の雰囲気としてトロツキーは言う。
「1907 年から 1911 年は、工業危機と軌を一にして、そうでなくても無力になったプロレタリアを疲弊させた。2,3 年前なら、警察の個々の専横に一斉のストを行った工場が当局のいかにも不埒な犯罪にも無抵抗で放置する。大きな敗北が人々を途方にくれさせる。」

「革命分子は影響力を失い、大衆の意識の中で、燃えきっていなかった偏見や迷信が頭をもたげる。懐疑主義者は皮肉っぽく首を振る。」

閉塞感のなかで、レーニンとともに「ボルシェビキ」の指導者だった医者で哲学者という多才なボグダーノフは、「労働者が革命をやりきらないのは、この社会でいいというブルジョア文化に染まっているから。」

そして、「革命後のプロレタリア文化を創りだしていくべき。我々の“社会・経済構造のもとでは、抑圧されているものは立ち上がる”という認識の仕方が古い。認識は労働者の経験を集団的に発展させていくべき」と当時の自然科学の新学説を踏まえて主張し、賛同者を集めた。

これに対して、レーニンはカンカンに怒って、「ブルジョア文化はそんなに簡単に壊れない。″経験“を集団的に発展させてもブルジョアの教養になるだけ。まず、もっともっとブルジョア国家を破壊すべきことを暴露して、“すでに噴出している大衆の興奮”をそこへ集めるべき。
その実践でこそ認識はつくられる。」

最後は、ボグダーノフの「国会にも参加せず」の政治的な態度を論破し、1906 年「ボルシェビキ」脱退に追い込む。一方、レーニンもこの論争で鍛えられ、「国家と革命」への認識を磨いていくことになる。

作家ゴーリキーが、レーニン３８歳にボグダーノフ 35 歳の主張を理解させようとカプリ島の自分の別荘に招いて、二人にチェスをさせている。1908 年 4 月

7.　第一次世界大戦勃発

—労働運動再興

ロシアでは、1910 年にはじまった工業の活発化で労働者は再び立ち上がった。1912 年 4 月には、シベリアのレナ金鉱山でストライキが起こり、この争議の弁護士として、後の臨時政府首班となる社会革命党のケレンスキーが名を売る。

この年、政治ストは再び参加者 55 万人と膨れ上がり、新たな革命攻勢がはじまる。1914 年の上半期には、政治ストの参加者の数の面では、1905 年の革命の絶頂期に近づこうとしていた。
しかし、戦争が、その過程を急激に断ち切る。

—「戦争拒否」バーゼル宣言

1912 年 11 月、各国の社会主義者は、当時のバルカン戦争と迫り来る欧州の戦争に対して、バーゼルで緊急に開かれた第二インターナショナルの大会で、「労働者は戦争を拒否する」と言う「バーゼル宣言」を採択した。

「宣言」は言う。「資本家の利益、王朝の野心などのためにお互いに撃ちあうことを、プロレタリアは犯罪とみなす」労働者に祖国はない。戦争が起こった場合、労働者は民族としてふるまうべきではない。

「各国政府は、普仏戦争がパリコミューンの勃発を伴ったこと、日露戦争がロシア諸民族の革命のエネルギーを解き放ったことを忘れるな。」
「支配階級の世界戦争に続きプロレタリア革命が起こりはしないかという恐れは、平和ための本質的な担保である。」

「プロレタリアートは今まさに人類の未来を担おうとしている。プロレタリアートは、自らのすべてのエネルギーを費やして、各民族の精華が滅びるのを阻止する。」

—「祖国を守れ」

1914 年 6 月 28 日、サラエボでオーストラリア皇太子がセルビアの青年に暗殺されたとき、初の世界戦争の導火線になるとは、ほとんどの政治家やジャーナリスト、そして社会主義者たちも予想できなかった。

しかし、数週間の外交的緊張の末に、7 月 23 日オーストリア政府がセルビアに最後通牒。ロシアがセルビア支援を発表。8 月にドイツがロシアに宣戦布告。

ヨーロッパ各国の労働者は、当初、大規模な反戦デモを行っていたが、政府の本当の意図を隠した「民族の国家と文明の存亡を賭けた戦争だ。国民、民族として、祖国を守れ」という宣伝が次第に成功していった。

ロシアでは、「軍太鼓が鳴り出すや否や革命運動は凍結した。もっとも積極的な労働者は動員された。革命分子は工場から前線へ投入された。ストライキには厳罰が加えられた。労働者出版は一掃された。労働組合は窒息させられた。修理工場には何十万という女性、未成年、農民が流入された。」（トロツキー）

11 月には「ボルシェビキ」の国会議員団が逮捕され、全国的にも「党破壊」が進められた。「工場でも誰もボルシェビキと自称する勇気を持ち合わせなかった。」（トロツキー）

—ドイツ社会民主党の裏切り

ドイツでは、労働者も社会主義者も「祖国防衛か反戦か」でジレンマに陥っていた。8 月、政府が戦時公債発行の承認を議会に求めたとき、2 年前の選挙で 4 割の得票を得て議席も第 1 党になっていた社会民主党は選択を迫られた。

8 月 3 日、社会民主党国会議員団は会議を開き、78：14 という大差で戦時公債への賛成を決議し、よく 4 日、議会で全員一致して賛成した。

レーニンは、翌日、亡命の地スイスの新聞で知り、仰天し、顔面蒼白になり叫んだ。「第二インターンナショナルの死滅だ！」

8.　帝国主義戦争を内乱へ

—スイス・ツインメルヴァルド会議

第二インターナショナルがもろくも崩壊し、それまでの労働者の運動と組織のすべてがその無力をさらけだした。

レーニンは、それまで、ドイツ社会民主党をほとんど全面的に信頼していた。ヨーロッパの社会主義革命はロシア人よりもドイツ人に指導されるだろうとも期待していた。だから、激怒し落胆した。

しかし、激怒から覚めると、レーニンは、すべての立て直しを決意した。まず、この戦争をもたらしている状況は、成熟してきた資本主義が資本の利潤のため領土を広げるしかなくなった「帝国主義」とした。

そして、当時、社会主義者のなかでも強かった見解。「この帝国同士が、やがて政治的対立を克服し植民地を共同で搾取する国際トラストになる。それが社会主義移行の前提になる。」に対して、レーニンは、「とんでもない。帝国同士の対立は決して解消せず、再び戦争も起こる」と主張。だから、「戦争を革命で終わらせる。」すなわち「帝国主義戦争を内乱に」というスローガンを導入した。

1915 年 9 月、スイスのツインメルヴァルドで開かれた国際社会主義者の会議で、レーニンは、「ツインメルヴァルド左派決議」を提出する。

「この帝国主義戦争で言われる“祖国擁護”とは、ブルジョアが賃金奴隷制を永久化するために他民族を抑圧する権利を“擁護”すること。社会主義者の責務は、“祖国の敗北”をためらわず、この戦争を抑圧者に対する被抑圧諸階級の内乱へ、社会主義の実現を目指す戦争へ転化すること。」

決議は 16：12 で否決され、採択にはいたらなかったが、1917 年 10 月革命で実現される。

—大衆の新たな爆発の気運

戦争への動員で、ペテルブルグでは、労働者の４０％は新しくなり、革命の継続性はひどく失われた。しかし、戦争が進むにつれて、その実態がみえてきた。戦争を通じて、ロシア軍死者は 250 万人（全協商国戦死者の 4 割)。一方、工場主の戦争利潤率は 100%超だった。

まずは、大衆の怒りは、食糧暴動にはけ口を見出し、各地で局地的反乱の形をとった。女性、老人、未成年が市場や広場で大胆にふるまった。

工場への非熟練労働力の流入と戦争利潤のあくなき追求のせいで、いたるところで、労働条件の劣悪化が生じた。物価の上昇で賃金は自動的に低下した。経済ストは大衆の不可避的な反射行為だった。抑えつけられるほど激しくなった。

1915 年 6 月 5 日、ロシア中央部の繊維工業地区のコストローで繊維労働者に警察が一斉射撃。死者 4 名。8 月 10 日、やはり繊維工業都市イヴァノーヴァで軍隊が労働者を銃撃。死者 16 名。これに対して、各地で抗議ストが起こる。

戦争の最初の 1 年で国の工業力のおよそ 5 分の一が失われた。国内で生産される繊維製品の約７５％を含めて総生産高の５０％までが軍隊と戦争の需要にあてられた。

工場主はしだいに労働者に譲歩しなくなり、政府は苛烈な弾圧でストライキに応じた。それらすべてが、労働者を経済から政治におしやった。「いっせいにたちあがらなければだめだ」ゼネストの構想が蘇る。

1916 年末には、物価が飛躍的に上昇する。10 月以降、「食糧、物価高、戦争、政府」をテーマに闘いは、あらゆる不満を一つに結集して、1917 年 2 月に向けて、助走を始めた。

1917 年 2 月はじめの 2 週間、ストや集会が絶え間なく続く。14 日にはペテルブルグで約 9 万人がストライキ。16 日、当局はペテルブルグでパンの配給制の導入を決定し、大衆の神経を逆なでした。
19 日、食料品店に大勢の群集、とりわけ女性たちが集まった。パン屋の襲撃もあった。1917 年 2 月の革命がはじまる 2 月 23 日（西暦３月８日）国際婦人デーまで、あと 4 日だった。このときレーニン４６歳。

9.　革命ははじまっている

—1905 年の革命

2 月革命が勃発する直前の 1 月 9 日、スイスの労働者に対して、1905 年の革命について講演した。

この講演は、レーニンが最後に「我々、老人は、恐らく、生きてこのきたるべき革命の決戦を見ることはないだろう。」と語ったことで有名。

レーニンがロシアにおける即座の社会主義革命の可能性を予見も確信もしていなかったことを示す証左とも受け取られてきた。

しかし、この講演の冒頭では、「今日は、〝血の日曜日“、すなわち**正当にもロシア革命の始まりとみなされている日**の 12 周年記念日である。」

レーニンは、「いつはじまる」のではなく、「すでにはじまっている」ということを言い切っている。

1905 年の革命は、すでに見たように「敗北」し、十分な政治改革の成果を生じさせたとはいえないが、それにもかかわらず、レーニンはここからすでに革命ははじまっていると断言する。

ここには、レーニンの認識の核心、「革命は特定の時間にはじまるものではなく、つねにすでに進行しているラディカルな現実そのもの。」そして「革命の現実性がすでにある」という認識が感じられる。

「1905 年に“陛下に陳情し裏切られた”ロシアの無教育な労働者が、彼らがはじめて政治意識に目覚めた正直な人々であることを彼らの行為によって証明した。」

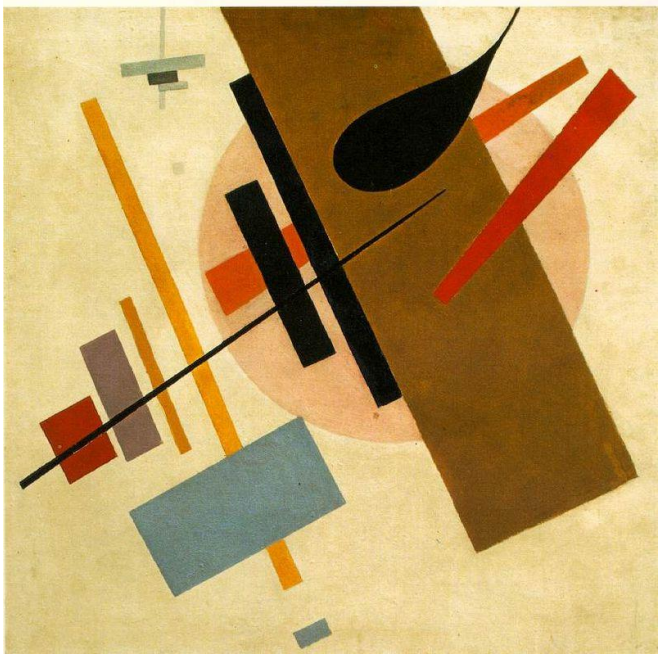
そして、「大衆的な政治ストを通じて、数ヶ月で、およそプロレタリアに眠れるエネルギーがどんなに大きなものであるかを証明した。」

同時に「最も平和な、最も民主主義的な資本主義国でさえ、どんなに小さなストライキであれ、その資本主義国の小さな危機。」

「大きな危機の際に必ず大規模に繰り返さずにはおかない闘争の要素と萌芽を示している。ドイツ内相が言ったように“どのストライキも革命のヒドラが潜んでいる”」

「ロシア革命はヨーロッパ革命の序曲である。我々は、ヨーロッパの墓場のような静けさに欺かれてはならない。ヨーロッパは革命を孕んでいる。帝国主義の恐るべき惨禍、物価騰貴に恐怖は、いたるところに革命気分を生み出している。」

そして、「老人には革命は見られない」と言いつつ、「私は強い確信を持って次のような希望を述べていいと思う。それは、スイスや全世界の社会主義運動でこのように立派に活躍している青年諸君は、きたるべきプロレタリア革命で闘争するだけでなく、さらに勝利する幸福をもたれるであろう、ということである。」と講演を結んだ。



革命後の芸術運動―ロシア・アヴァンギャルド
マレーヴィッチの作品（1916-1917 製作）
「スプレマティスム」
レーニンの革命を「歴史」の終結と新しい歴史の開始として
熱狂的に受け止めたマレーヴィッチは
ロシア・アヴァンギャルドの先駆者となった

―レーニンの「ドリン！ドリン！」

1906 年以来、亡命しているレーニンとロシア国内の「ボルシェビキ」との連絡は、第一次大戦が始まり、弾圧され、細くなっていた。そして、このとき、彼の名を知っているロシアの労働者はほとんどいなかった。

しかし、すべての立て直しを決意したレーニンは、スイスのベルンで図書館に通い、マルクスが資本論で解き明かそうとした商品の矛盾の真の意味を見つめなおした。そして、彼は、マルクスが「ひっくり返した」と言いいながら深く依拠したヘーゲルの哲学を初めて研究し発見する。

「人間の意識（認識）は、客観的な世界を反映するだけでなく、それを創造しもする。」「すなわち、世界は人間を満足させず、そして、人間は自己の行動によって世界を変えようと決心する。そして、生き生きとした実践が始まる。」（レーニン「哲学ノート」）

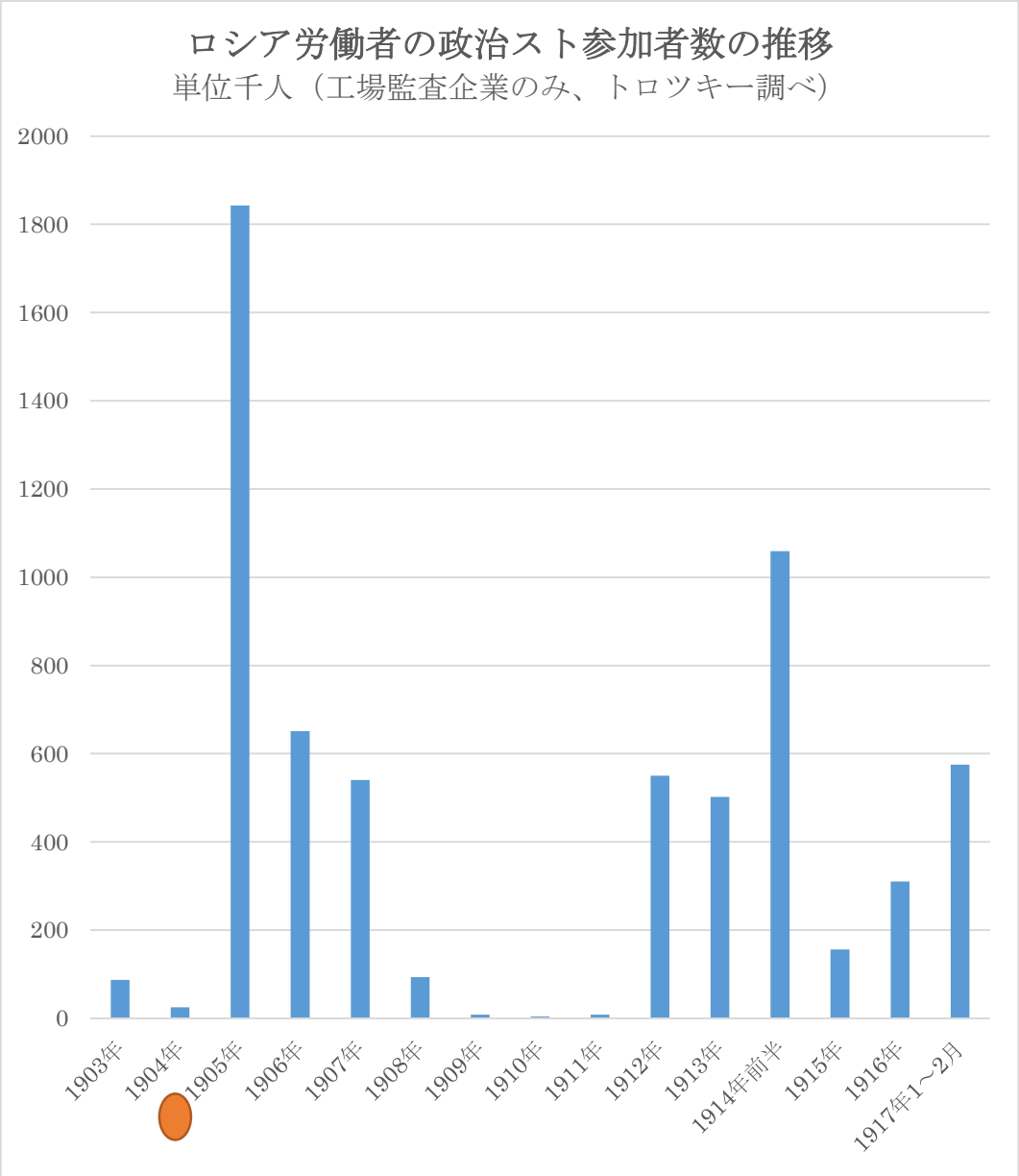
1905 年の革命の「敗北」以来、革命の「意識」の問題を課題としてきたレーニンは、孤独だが真剣な研究で“突き抜けた”。このとき、革命の時代に生きていることを心底から感じていた。

1908 年、カプリ島で、レーニンが地元の漁師に「いいかね。はじめにあたりがきて、釣り糸が“ドリン・ドリン”したら、すぐ釣り上げるんだよ」と教えられて釣りをはじめた。しばらくして、あたりがきて、レーニンは一気に釣り糸を引き上げた。針にかかった地中海の魚が、勢いよく、空中に躍りだした。レーニンは、漁師に教えられたイタリア語を叫んだ。「ああ！ドリン・ドリン！これだ！これだ！」

トロツキーは、このレーニンを「レーニンが魚を釣り上げて熱狂して叫ぶとき、彼が自然に対して抱いている熱愛がわかる。彼は自然に近いすべてのもの、子ども、動物、音楽を愛した。**この強力な思考機械は、思考の外にあるもの、科学的探究のそとにあるものに、ごく近くにいたのだ。**」と評する。（トロツキー「レーニン」）

レーニンは、「革命のなかにいる」ことを、「ドリン！ドリン！これだ！これだ！」と世界のなかにつかんだ。ある意味、ウキウキしていた！

大衆の蒸気の流れ(1905 年から 1917 年 1 月)



ロシアの 1905 年のように

日本の 2011 年 3 月 11 日から革命ははじまっている！

2015年6月21日プチ労その62

第三回　1917年の革命

第二回「1905年の革命」では、1905年「血の日曜日」で大衆の「蒸気」が吹き上がり、自らの組織「ソビエト」を生み出したが、労働者・農民の社会主義革命には至らず、皇帝に押さえ込まれた。
さらに、帝国主義戦争が第一次世界大戦となり、各国の社会主義者が戦争に賛成した。
その「絶望の淵」で、レーニンは、スイスで孤立しながらも勉強を続け、
「1905年から革命は始まっている」と言う新たな確信を持ち、「帝国主義戦争を内乱へ」というスローガンを生み出した。
彼は、ある意味、ウキウキしていた。2月革命まであと数日。
"革命の蒸気の動き“、日本も2011年3月11日から革命は始まっている。

1.　たちあがる革命の動力

―階級対立から発生した「力」は、ソビエトを創り育てた。

（1）2月革命

―5日間

2月23日（西暦3月8日）は、アメリカの女性たちが1904年にニューヨークで女性参政権を要求してデモしたことを記念して、19010年から毎年、各国社会主義者が、「国際婦人デー」として、デモしていた。

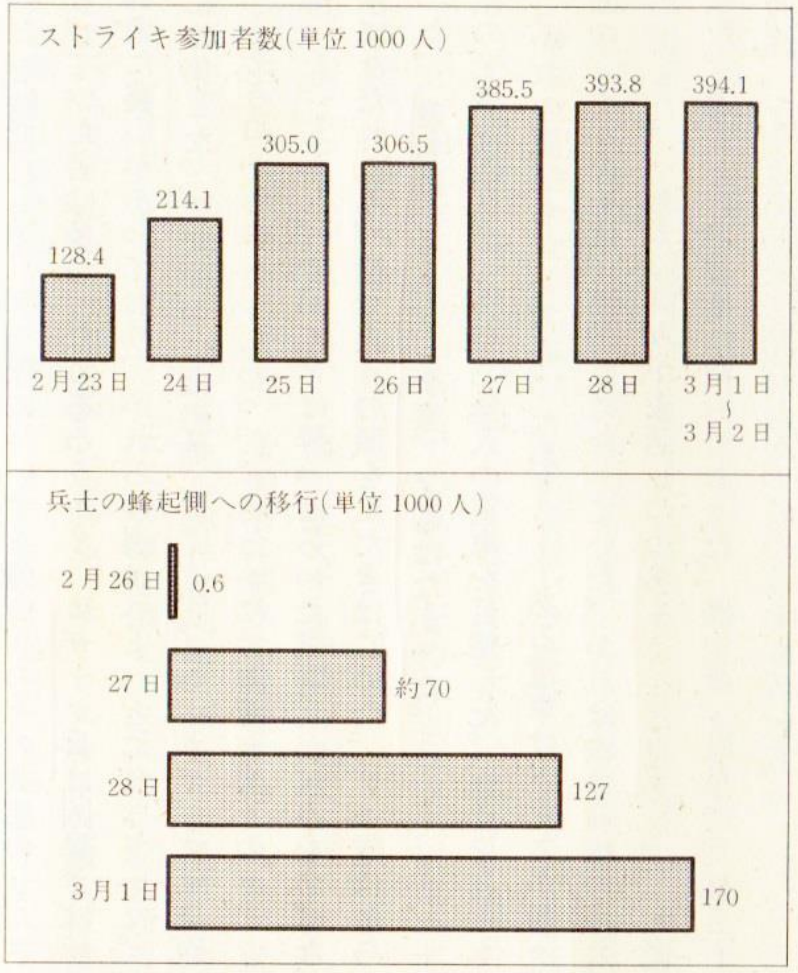
この日、ボルシェビキ、メンシェビキともに社会主義者たちは、平和なデモを行いストライキはしないと申し合わせていたが、1週間前の「パン配給制」の政府決定に怒り心頭に達していたペテルブルグの女性紡績工たちは、制止を聞かず、朝からストライキに入った。

翌24日には、女性たちの「パンよこせ」のデモに、他の工場の労働者も応じて武装蜂起した。労働者の参加者数は、13万人から1週間で40万人になった。
26日には、悩んでいた首都の兵士たちも順次合流し始めた。
26日兵士の合流は600人だったが、3月1日には17万人になった。

27 日には、タウリーダ宮殿に出来た革命本部をもとに、1905 年の革命以来「常識」となった労働者・兵士・農民代表ソビエトが樹立された。

―自由主義者、協調主義者のソビエト

ソビエトは、自由主義者、メンシェビキ、社会革命党が多数を占め、ボルシェビキは少数だった。工業・商業・銀行事務員や資本の官吏、労働官僚、ジャーナリスト、政治家といった「新しい中間層」。彼らは、「ブルジョアは敵と大衆に教えながら、何より大衆が敵の支配下から脱するのは恐れていた」



ペトログラードでの二月革命参加者数の推移

ブルジョアに臨時政府を樹立させようと画策した一人、スハーノフも社会革命党、その後メンシェビキになり、そうした中間層のすぐれた代表のひとり。彼は長編の「ロシア革命の記録」も書いた。

一方、「農民を救う」と言うナロードニキの流れを汲む社会革命党は、農民をはじめ多数の支持者がいたが、革命への支持は示すがいかなる義務もない「壮大なゼロ」。

農村の共鳴にも関わらず少しも農民党ではない。新中間層が多い幹部たちは、農民の幸せは願いながら赤い雄鶏(火事)は望まない。有産階級の危機感を反映した政党だった。

また、ソビエトの代表選出のルールは、兵士が 100 人に一人に対して、労働者は 1000 人に一人で、兵士が優遇されていた。戦争で疲れ、彼らの合流で革命がなったからということであった。

当時、軍隊は農民の軍隊だった。1912 年には、農民 59.5%、労働者 15.84%、識字率 47.41%。1914－1917 年の新規兵では、農民 66.52%、労働者 16.25%。1917 年 1 月の水兵は 15 万 4 千人、労働者 25.38%、農民・都市住民 48.62%、識字率 81.31%。そして、将校は主に貴族で、1913 年 6 万 5 千の将校のうち、貴族は陸軍で尉官 50.35%、佐官 72.6%、将官 89.19%。

しかし、兵士代表には、革命前後から、「蝶結びの赤リボン」をつけはじめた“自由主義的”な将校がなる場合も多く、彼らの雰囲気は、前線の部隊兵士たちの雰囲気とはかけ離れていた。

労働者の代表にも、インテリ、ジャーナリスト、弁護士など弁のたつ都市住民が自薦でなる場合も多く、街中とも同じく、ソビエトの雰囲気は「皇帝を飛ばして自由を謳歌するブルジョア革命」であった。

―ソビエトが「頼んで」ブルジョア臨時政府樹立

だから、27 日夜には、ソビエト執行委員会のメンバーは、タウリーダ宮殿の反対側の部屋に集まっていた、一部、皇帝の内閣の閣僚貴族などを含むブルジョア達に、「臨時政府を樹立してくれ」と頼みに行く。

ソビエト執行委員会の考え方は、「この革命はブルジョアの革命。ブルジョアにやらせて、ソビエトは監視する」というもの。執行委員会には、ボルシェビキ代表として、カーメネフがいたが賛成した。

スターリンもその後、流刑から解放されて加わるが反対しなかった。結果、ソビエトの大会にもはからず、温厚で知られるリヴォフ大公を首班とするブルジョア臨時政府が出発し、皇帝は退位する。

―2 月革命は誰が指導したか

「兵士が労働者を支持したのは、自分達と同じような働く人々の階級としての労働者との血のつながりを感じたからである。」ある経済学者は 3 月 10 日に「証券取引新聞」に書いた。

その労働者たちは、1905 年以来、生活に裏付けられた革命的経験をつんでいた。「今では、ボルシェビキに育てられた労働者が多くいた。しかし、ボルシェビキはただちに革命の指導的役割を保障するには不十分だった。」トロツキー

最初に決起したヴォルティーニ連隊の兵士たち

（２）レーニンの４月テーゼ

―臨時政府「戦争継続」決定

革命の死傷者は、1443 人。うち軍人が 869 人。丁重に葬られ。臨時政府は「無血革命」と称する。

連合国の「皇帝を倒し、帝政の続くドイツ、オーストリアと民主主義の対決の構図をはっきりさせた偉大な革命」と言う賞賛のなかで、革命の動力が戦争に疲れた兵士と労働者であったにも関わらず、臨時政府は、当然のように「革命防衛のために戦争継続」を宣言する。

―レーニン帰国

2 月 24 日にスイスで革命の第一報を聞いたレーニンは、今度は、1905 年のときのようにグズグズせずに、帰国の算段をする。

ヨーロッパ全体が交戦状態であるので、最も早いルートとして、「敵国」ドイツ政府と交渉し、一切、途中下車しないという条件で、ドイツ国内を通過する列車で帰国する。

なお、この列車は「封印列車」と呼ばれ、レーニンにとっては必要な選択だったが、後に「レーニンはドイツ政府のスパイ」という噂が出るもとにはなった。

―「狂人のたわごと」「精霊が飛びたつ」４月４日テーゼ

レーニンは 4 月 3 日ペテルブルグに帰ってきた。到着早々、ボルシェビキの会合で、用意してきた演説を厳しくはじめた。

(ア)臨時政府を一切支持しないし、帝国主義の戦争はしない。
(イ)ソビエトは唯一の革命政府の形態。それをすぐ目指すべきだ。
(ウ)革命政府は、民衆の武装により常備軍・警察を廃止し、官吏は選挙とリコール制、地主の土地は没収、労働者による生産統制をする。
(エ)しかし、まだ我々は少数で、ソビエトは協調主義で大衆は政府を信じているので忍耐強く丁寧にウソを暴露していく。
(オ)協調主義の社会主義者と区別するために、我々は共産党となろう。

ロシアにいたボルシェビキ幹部の対応を個人攻撃するものではなかった。しかし、その迫力には、みな唖然とし、カーメネフ、妻のクルプスカヤでさえ、「気が違ったかと思った」

一方、会合に紛れ込んだメンシェビキのスハーノフは、もとは宮廷バレリーナのきらびやかな邸宅だったクシェーンスカヤ宮殿にあるボルシェビキ本部で行われたレーニンの演説について記録している。

「私は、その雷鳴のような演説が忘れられない。たまたま紛れ込んだ異端者の私だけでなく、正統派もみな、それに震え上がり、仰天した。そのようなものを予期した者はだれひとりいないと、私は主張する。」

「あらゆる自然力が自分たちの巣から起き上がり、万物を破壊する精霊が、障害も、疑念も、人々の苦労も、人々の思惑も知らずに、クシェーンスカヤ宮殿の広間で、魔法にかけられた弟子達の頭上を飛び交っているように思われた。」

翌日、レーニンは演説の内容を「4 月 4 日テーゼ」という文書にまとめ、党の協議会で承認させたが、レーニン以外、文書にサインする中央委員は誰もいなかった。

—労働者が反応。4 月事件

「読んだこともない」4 月テーゼに反応したのは、労働者と兵士だった。4 月 19 日、労働者と兵士数万人のデモが起こった。

ソビエト執行委員会がソビエトの労働者、兵士をないがしろにしてすすめた臨時政府への不満だった。

「ブルジョア大臣辞めろ！」、一方で、ブルジョア政党であるカデット党の組織したデモもあり、「引き分け」にも見えたが、結果、ブルジョア大臣が辞任し、ソビエトから協調社会主義者が入閣し、ブルジョア臨時政府は打倒された。

ケレンスキーをはじめとしたこの協調主義者政府は、想定していなかったデモ、蜂起をおそれ、2 月革命で機能を停止していた警察を「民警」として復活させようとする。

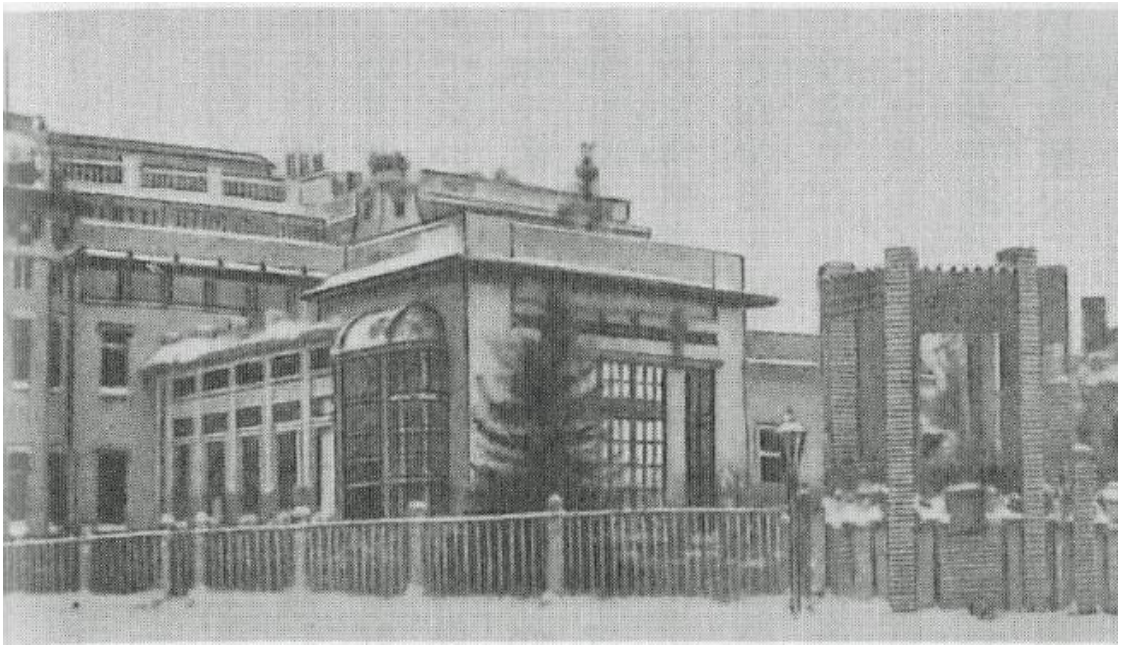
また、農民の不満を抑えようと「全国土地委員会」を設置するが、10月革命まで、結局、何もしない。

—大衆の武装解除をさせるな

政府の「民警」に対して、レーニンたちは、「民衆の武装解除を許すな」と労働者民兵の組織を呼び掛ける。

これに答えて、5月末、ペテルブルグの工場委員会の代表者会議では、4月テーゼにある、「労働者による生産統制」と「労働者民兵の組織」を決議する。

4月テーゼは、労働者の要求に応えていた。



「狂人の戯言」が語られ「精霊が飛び立った」クシェーンスカヤ宮殿

（３）闘い続ける労働者、逃げるブルジョア

―８時間労働制の闘い

革命直後、8 時間制労働制の問題が焦点になった。政府は「まず、兵士は兵営へ。労働者は工場に帰れ」と言う。ソビエト執行委員会は、工場再開を決定する。

労働者は「工場に帰るが、何も変わらないのか？」と 1905 年の革命以来の課題、8 時間労働制を要求した。

執行委員会の多数派、メンシェビキは言う。「労働者はまず政治的自由を獲得しつつある。経済闘争はまだだ。」労働者は「まず、我々の筋肉と神経の自由をよこせ」と闘い、工場主を譲歩させた。

政府とソビエト執行委員会が拒否するものを自分で手に入れた。

３月、４月に、８時間労働制をかちとり、労働者には、読書・会合・ライフル銃の訓練の「自由時間」ができた。

「戦時に自分のことだけ考えるのか」と将校は兵士に労働者を非難するようにけしかけたが、労働者は兵士の工場訪問を企画し討論し理解を得ていった。

メンシェビキの権威は落ち、ボルシェビキの立場が工場で、部分的には兵営でも強まった。

―戦争の打撃とブルジョアの逃亡

戦争はヨーロッパ全体の鉄道に打撃を与えた。５月には、輸送の崩壊により物価が高騰し、都市の食糧事情は再び深刻になった。経済崩壊の兆候がいたるところで明らかになり、生活費は上がった。

戦争と経済の見通しがはっきりしなくなり、「所有権」は頼りなくなった。無尽蔵に見えた戦争利潤は低下し始め、経営の危険性は増大した。経営者は革命の状況のもとで、生産意欲を失った。

ブルジョアにとっては、経済麻痺による一時的な損失や赤字は、彼らの存在をおびやかす革命と闘う経費だった。

工業主は、ペテルブルグで、３月から４月にかけて、９千人の労働者を擁する 129 の企業を閉鎖。５月には、同様の数の労働者を擁する 108 の企業、６月には、３万８千人を擁する 125 の企業が閉鎖し、７月には、206 の企業の４万８千人の労働者を街頭に放り出した。

ペテルブルグに続いて、繊維工業のモスクワが動き始め、地方がモスクワに続いた。重工業の過半を牛耳る英仏等の外国資本をはじめ、戦争利潤を謳歌してきたブルジョアが一斉に「逃亡」を始めた。

―労働者に見えてきたこと「国を変えることだ」

労働者が作る工場委員会が、事件に介入し、多くの場合、生産混乱は、労働者に圧力をかけるためか、国家に補助金を強要することを目的に故意に起こされていることを明らかにした。

特に、大使館を通じて活動している外国の資本のふるまいが厚かましかった。

経営者は、「問題なのは、全国民の生活に必要な企業ではなく、自分の煙草入れでもあるかのように、工場を閉鎖する」こと、つまり「生産の社会的性格と生産手段の私的所有の矛盾」が、あまりにあからさまに労働者に見えてきた。

労働者は、工場閉鎖のおかげで、自分達で工場を統制しなければならないこと、さらに、工場は国家が掌握しなければならない、という考えを持つようになった。

それを決定的にはっきりさせる役割を担ったのは、またしても、ストライキだった。

ストライキは、今まで登場しなかった、最も搾取がひどい階層で激しくなった。洗濯女、染物師、桶職人、商工業事務員、建築工、青銅細工師、塗装工、雑役夫、靴職人、ボール紙職人、ソーセージ工、家具工たちが、６月を通じて次々とストライキに入った。

反対に、金属労働者など、先進的な大工場の労働者たちは、それを抑える役割を演じ始める。

個別的な経済ストでは本格的な好転は得られないこと、必要なのは、基盤そのもののなんらかの変化であることが、次第に明白になっていったから。

―工場委員会、労働組合増加とボルシェビキ支持急増

労働者たちは、政治的に変化してきた。最大工場プチロフでは、それまで、社会革命党の牙城といえたが、６月前後には、ボルシェビキの側に移った。

自分たちの工場を蘇生させるために苦労していた工場委員会が動いた。４月テーゼに賛成した５月末のペテルブルグの工場委員会の代表者会議では、421 票のうちボルシェビキへの賛成は 335 票だった。

労働組合への参加が増え、6 月の労働組合代表者会議では、ペテルブルグに 25 万人以上の組合員を擁する 50 以上の組合があった。金属工組合では約 10 万人の組合員。5 月の一ヶ月間でも組合員の数は二倍に増えた。

全国では、労働組合の連合会が４００、2 月に 10 数万人だった労働組合員数 140 万人になっていた。このなかでのボルシェビキへの支持が急速に増えていた。

（４）農民の蜂起

―動かない農民、動かないソビエト

「土地をよこせ」と言った２月革命後の数週間、農村はほとんど動かなかった。最も活動的な年齢層は前線にいた。ソビエトは、労働者の８時間労働制の問題と同様に、「都市への食糧供給を犠牲にするような農業問題には熱中しない」と勧告した。

しかし、富農は細々と土地を買い集め、地主は「大土地所有廃止」を言われる前に、自分の所有地を人為的に名義だけ細分化したりしていた。農民代表は、まずは、首都に陳情し、「土地売買の一切禁止」を求めた。

―動いた農民

3 月になると、農民が動き始めた。全国の３４の郡で農民蜂起が起こった。臨時政府がつくった全国土地委員会は何もしなかったが、現場に近いある県の“郷や村の土地委員会”は、地主逮捕して追放したり、土地を占拠したりした。

ケレンスキーが約束した「土地売買禁止令」もなかなか出なかったため、農民たちは土地の測量実施を妨害し、領地の売り渡しを自分達なりの手段で阻み始めた。地主の銃の没収も拡大し始めた。

4 月に、農民蜂起は 174 の郡に、5 月には 236 の郡に拡大した。
5 月 20 日、レーニンはペテルブルグで開かれた農民大会で演説した。「彼は、鰐の群れのなかに入り込んだようだった。が、農民たちは注意深く耳は傾けていた。」とスハーノフは記録する。

レーニンは、「我々は、ただちに農民に土地を譲渡させることを主張する」と言った。農民は「ボルシェビキは恐ろしい」と思っていたが、黙ったまま共感した。

農村での紛争で、地主に制裁を加えるために、彼らから「法律的援助」を借りられる限り、農民は社会革命党についてきていた。しかし、この大会で、社会革命党は、農民蜂起に恐れをなし、中止の合図を出した。

「土地については、憲法制定会議まで待たなければならない。あらゆる勝手な土地の占拠は非難される」と決議した。しかし、その決議は、農民運動を弱めはしなかった。６月に、農民蜂起は、280 の郡で、7 月には、325 の郡で、8 月には、全国の郡の 8 割、921 の郡に拡大した。

農村にソビエトはまだ少なく、郷の土地委員会が蜂起の拠点となり、蜂起が広がるにつれ、旧来のミール(農村共同体)の「寄り合い」が、革命の機関に変身した。

―「地主の財産は我々のものだ」

農民たちは、地主財産の略奪をこう正当化した。「地主はわれわれの地主だった。われわれは地主のために働いた。だから、地主が持っていた財産はわれわれだけのものにならなければならない。」

かつて貴族は農奴にこう言った。「お前達は私のものだ。だからお前達のものはすべて私のものだ」いまや農民はこう応じる。「旦那は我々の旦那だ。だから財産はすべて我々のものだ。」

―「ボルシェビキをくれ！」

農民の要求は「地主から土地をよこせ」だった。だからこそ、農民は社会革命党の「土地と自由」という綱領を支持した。その意味で、まさに民主主義革命の課題だった。

しかし、社会革命党は、地主に多額の融資をしている銀行の猛烈な反対で、政府として綱領を実行に移せなかった。憲法制定会議で土地の価格を地主と取引することにせざるを得なかった。

政府が、農民蜂起を各地で鎮圧しようと、軍隊を派遣すると、多くの兵士は、自分たちの出身である農民を擁護した。そして、「レーニンを読んだこと」もなく「ボルシェビキは怖いもの」という農民に「レーニンの話」をした。

次第に、農村で、社会革命党が、ボルシェビキを「略奪者」や「裏切り者」と呼ぶと、「俺達に作り話をするな！土地はどこにある！もうたくさんだ！ボルシェビキをくれ！」と農民がいきりたってきた。

（５）ソビエトの変化

—7 月事件

6 月に、臨時政府首班であったケレンスキーが「革命精神を発揮せよ」と東部戦線で大攻勢を指令。しかし、攻勢は数日で頓挫し、ドイツの反攻に会い、兵士の士気はさらに低下した。

7 月 3 日、ペテルブルグ街頭で、第一機関銃兵連隊やプチロフ工場労働者が「戦争中止！権力をソビエトへ！」を掲げて武装デモを行い、翌日には、参加者は 50 万人を越えた。

当初、ボルシェビキは「時期尚早」と抑制を呼びかけていたが、デモが始まると先頭に立たざるを得ず、翌々日には収拾を図った。政府は、郊外のコルニーロフ将軍の軍隊も呼び寄せて弾圧し、死者 30 名。

政府、およびこの間静観していたソビエトからは、「レーニンはドイツのスパイだ」という情報が流され、「混乱の責任は、ボルシェビキにある」として、ボルシェビキは非合法化され、トロツキーは逮捕。

レーニンは、「顔を知られていなかった」ため、別人が誤認逮捕される間に、フィンランドに逃亡し、10 月革命の前夜まで潜伏する。

—ソビエトの失墜と拡大

やむにやまれず兵士と労働者が蜂起したペテルブルグをはじめ、大都市では、「何もしない」ソビエトに大衆は大いに幻滅。一方、全国では逆にソビエト結成が急速に増えてきた。農村でも農業労働者のソビエトがつくられてきた。

このとき、全国のソビエト数は６００を数え、それらが基盤とする有権者数は 2300 万人に昇った。新たなソビエトでは、メンシェビキや社会革命党に代わり、ボルシェビキの勢力が多数占めるようになってきた。

7 月末、ボルシェビキは第 6 回大会をペテルブルグの労働者地区で密かに開き、レーニンも潜伏先から鬘をつけ髭を剃った変装姿で参加した。

トロツキーとその仲間達（メジライオンツイ）は、この間、ボルシェビキとほぼ同様な主張をしていることから、この大会で正式にボルシェビキに加入した。

そして、7 月以来の情勢を踏まえて、平和的な移行も可能かという意味でも掲げていた「権力をソビエトへ」のスローガンを一旦取り下げて、明確ではないものの、「労働者、農民自らの権力のために武装蜂起も辞さない」という方向を決議した。

―コルニーロフの乱と労働者の武装

8 月 25 日、7 月事件の鎮圧で活躍したコルニーロフ将軍が、2 月革命前の秩序の復活を目指して、配下のコサック中心の軍隊を動員してペテルブルグに進軍。

焦ったケレンスキーは、手のひらを返して、ボルシェビキに労働者部隊の応援を頼む。政府の武器庫が解放され、労働者の武装として、6 月には労働者赤衛隊が結成されていたが、その貧弱な装備が充実した。

この労働者部隊の活躍で、コルニーロフは敗退。この混乱で、8 月末、臨時政府は、全権をケレンスキーに付与し、彼の「執政府」となった。

―ソビエト、再び闘う機関へ

ソビエトへの期待が薄れた結果、労働者の運動の中心は、闘い続けていた労働組合と工場委員会になっていたが、コルニーロフの乱も経て、その工場委員会などの闘いの息吹が、ソビエト代表の交代などで、次第にソビエトに伝わっていった。

そして、9 月、ソビエトの中心、ペテルブルグソビエトで、現在の幹部会と執政府との連立を支持する決議が、賛成 414 票、反対 519 票で否決され、幹部会は辞任し、ボルシェビキが指導権をとることになった。

（６）レーニンの「国家と革命」

―革命の「未来」が必要

8 月に、レーニンは潜伏先で一気に「国家と革命」を書き上げた。それは、国家とは何か。パリコミューンの経験とはなにか。共産主義の社会とはどういうものか。相当、アカデミックに検討したものだった。

この著作は、実際に公開されたのも革命後の 1918 年である革命党の指導者が、緊張した革命への実際の政治的道程を歩みながら、どうして、こんなものを書いたのか。潜伏してひまだったからか。

しかし、彼には、労働者・兵士・農民に革命した後の「未来」を見せる必要があった。どうして今の国家を破壊するのか。それを何に取り替えるのか。その整理が必要だった。

―古い国家をソビエトに取り替える

「旧来の機構に取って代わるものはないという連中は恥じるがいい。それはある。ソビエトこそそれだ。大衆の創意と自主性を恐れるな。大衆の革命的組織を信頼せよ。そうすれば、労働者や農民がコルニーロフの乱で、反乱に抗して、団結と情熱の中で発揮した力、偉大さ、不屈さを国家のあらゆる活動領域で見出すだろう。」

レーニンは、「狂人か」と言われながら 4 月 3 日に示したテーゼを「再び闘う機関になったソビエト」など、実際の事態の推移と並行して、マルクスの学説、パリコミューンの歴史の教訓から理論的に整理する。

―ブルジョア独裁からプロレタリア独裁へ

「人類の歴史は階級闘争の歴史」ではじまるマルクスの「共産党宣言」は、革命を「労働者革命の第 1 歩はプロレタリアートを支配階級の地位に高め、民主主義を闘いとること」とした。

さらに「プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、ブルジョアジーから次第に全ての資本を奪い取り、全ての生産用具を国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産力の総量をできるかぎり早く増大させる。」と書いた。

レーニンは、この「国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」をあらためて、「プロレタリア独裁」と呼んだ。

「今までの国家は、とどのつまり、ブルジョア独裁であり、資本主義から共産主義へ移行する過渡期には、本質的には、ただひとつ、プロレタリア独裁だろう。」これが、古い国家をソビエトに取り替えた国家である。

―プロレタリア「独裁」による「民主主義」の実現

レーニンによれば、マルクスの言う「労働者革命で闘いとる民主主義」を「プロレタリア独裁」によって実現する。

市民革命以降、近代国家では、「議会制民主主義」が定着してきた。それは、国家が「常備軍と警察」を充実させ、民衆を武装解除し国家に暴力を集中させることと一体だった。

その一方で、議会で「平和に議論して、国と国民の方向と政策を決める」。その際の民主主義のひとつの定義は、「均質な主体の自由な討議で”真理”を明らかにすること、すなわち自由民主主義」

それは、「もう王はいらない」という掛け声から、「誰も支配してはいけない」という暗黙の「原則」により、「みんな均質だということを前提にせざるを得ない」、という「合理化」だった。

”自由民主主義”は、最低の投票率を生んだ今の日本の政権の名前。

もう少し言えば、民主主義は「平和」を生む「思想」ではなく、「多数決で決めれば平和も戦争もある」という「方法」であり、その方法を担保する法体系などの「制度」のことである。

―民衆の支配がデモクラシー

もともと、民主主義―デモクラシーの言葉は、ギリシャ語の「デモス＝民衆」と「クラシー＝支配」すなわち“民衆の支配”。

古代ギリシャ市民から見れば、民衆が武装し暴動を起こしたカオスの状態で、「衆愚政治」として忌避すべきものだった。

—民主主義と暴力

その民衆の武装、抵抗、暴力を封じ込めてきたものが近代国家。

暴力が一番大きく生じうる階級と階級の対立を隠蔽するために、暴力の国家への一元化を行った。

資本家と労働者の対立の際には、国家が介入して諌める。

「公正で自由な取引」として賃金を決め雇った労働者が工場でストライキし工場占拠をしたりすると、資本家は直接暴力をふるわず、必要なら警察や軍隊を要請して排除する。

一方、社会から暴力がなくなったのではない。

まさに、第一次世界大戦から、20 世紀が「総力戦の世紀」であったように、国家同士の暴力が史上最大になり、それは 21 世紀になっても、イラク戦争などずっと続いている。

その総力戦の前提は、国民を軒並み動員できる「国民の均質化」で、民主主義の前提と同じ。均質化した国民はファシズムに進む。

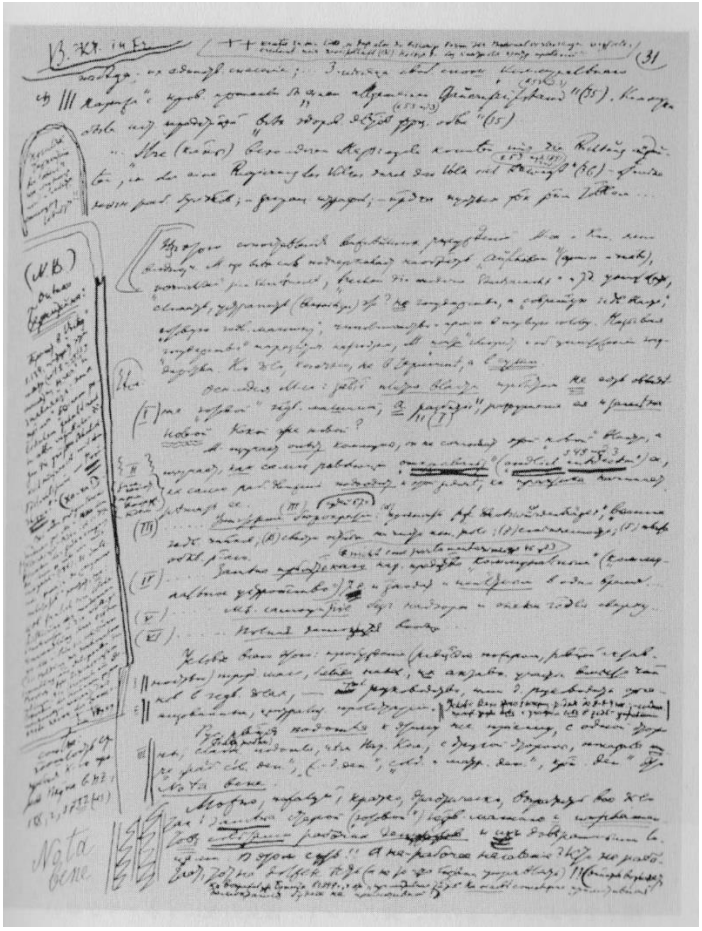
これに対して、パリコミューンは国民軍に依拠して常備軍を廃止し、レーニンたちは、盛んに労働者の武装につとめた。

—「街頭」と「議会」の中間、ソビエトは「民衆の支配」の機関

1905 年の革命以来、ロシアの大衆は「ソビエト」を創造した。工場でのストライキ、農村での蜂起、兵士の反乱から、ソビエトは創られた。

大衆の武装と闘いのなかから組織されたと言う意味で「街頭」とつながり、大衆が自ら「評議」する機関であるという意味で「議会」であるソビエトは、「街頭」と「議会」の中間の絶妙な位置を占める。

レーニンは、この、大衆が創造した絶妙な機関を通じて、プロレタリア独裁、すなわち、「カオス」ではない民衆の支配を実現しようとした。



「国家と革命」のための「国家論ノート」

鬘と髭を剃って変装姿のレーニン

（７）ボルシェビキの「迷い」と武装蜂起決定

―勤労者は国家を動かせるか

「最左派を含め民主主義者が、労働者・兵士・農民の権力奪取に反対する主な論拠は、勤労者には国家機構を動かす能力がないだろうということ。ボルシェビキ内部の慎重派の懸念も同様のことだった」（トロツキー）。

7 月以降、潜伏したレーニンは、「国家と革命」の整理を踏まえて、度々、「武装蜂起し権力を奪取すべき」と言う手紙をペテルブルグにいるボルシェビキ中央委員会に送ったが、彼らは迷っていた。

「今、蜂起すると孤立するのではないか？　大きな内乱が起こるのではないか？　労働者赤衛軍が 4 万人いても、15 万人の軍隊とは装備の点でも勝てない。さらに権力をとったとして、国家を運営できるだろうか？」

9 月 15 日の中央委員会では、「レーニンの手紙」を扱いに困って、全員一致で焼き捨てることにしたりする。

―武装蜂起決定

メンシェビキのスハーノフは、妻がボルシェビキ。なんと、彼のアパートを借りて、10 月 10 日、開かれた中央委員会に、業を煮やしたレーニンは、鬘と髭なしの変装で参加する。

スハーノフが気を使って外泊している間、夜を徹して行われた会議で、レーニンは、「大衆は言葉と決議にうんざりしている」「大衆は我々の 100 倍ラディカルだ」と論陣を張り、ついに武装蜂起決定を勝ち取る。

この決議文自体は、議論の終盤に、レーニンがその場で、ちびた鉛筆で子供用の方眼用紙に走り書きした。

12 人の参加者中、カーメネフとジノヴィエフ二人が反対し、１０：２の決定だった。

（８）国家の特殊な力—兵士の合流

—軍事革命委員会発足

同じ頃、ドイツ軍が首都ペテルブルグまで 400 キロの地点まで迫り、メンシェビキの方から、「首都防衛のために軍事委員会をつくろう」と提案があった。

ボルシェビキにとっては、武装蜂起のための本部として「渡りに船」だった。審議に 1 週間かかったが、10 月 16 日には、ペテルブルグソビエトで「軍事革命委員会」の設置が承認された。

—守備隊協議会が軍事革命委員会支持決定

21 日、ペテルブルグの 15 万人の守備隊の代表が集まった協議会で、軍事革命委員会への支持が決定された。

ケレンスキー執政府は、迫り来るドイツ軍に対して、疲れきった前線兵士に代えて、余裕のある首都守備隊を送ろうと画策していた。その一方で、政府自体は、モスクワへの避難を検討していた。

これに対して、「前線に移動させられ戦争を続けるのはイヤダ！」さらに、農民が多い兵士たちは「死んでしまうなら自由や土地が何になる」

—国家の「特殊な」力の解消

レーニンが「国家と革命」で、常備軍を「国家の特殊な力」と呼んだ意味は、今の国家がブルジョア独裁であるのに、ブルジョア自身は暴力を用いずに、国家に暴力行使を代理させている。

その暴力行使を行う当事者、兵士、警察官一人ひとりは、抑圧すべきプロレタリアであり、農民だという、ねじれた関係であることだった。

2 月革命よりも画然と組織的な兵士の合流は、労働者、農民の革命の動きを前にして、バネが戻るように、このねじれが戻った、「特殊性」が解消した瞬間だった。

階級対立から発生し、階級対立を隠蔽する国家を維持する「特殊な装置」が解体した瞬間だった。

2.　革命

—ソビエトは、大衆の武装と行動で組織されたという意味で「街頭」とつながり、大衆が自ら評議すると言う意味での「議会」。この「街頭」と「議会」の中間という絶妙な特徴を持つソビエトを通じて統治するという、「民衆の支配」が出発した瞬間。
その瞬間には「暴力」が沈黙した。

（１）10 月 25 日—暴力の「沈黙」

—前夜

24 日の夜遅く、レーニンは鬘と髭なしの変装のまま、ペテルブルグソビエトと軍事革命本部がある、上流階級の令嬢の養成学校であったスモーリヌイ宮殿に現れる。

武装蜂起方針決定後も、レーニンは、「25 日から開かれるソビエト大会まで、蜂起を待ってはならない」と盛んに言っていたが、21 日の兵士の合流を含め、トロツキーたちで準備は終わっていた。

トロツキーは、「政府がしかけてくれば蜂起もある」とソビエトでの質問などに煙幕を張りながら、実際には、24 日朝、ケレンスキー執政府が、軍事革命委員会の逮捕とボルシェビキ機関紙の発行禁止を決定したことが引き金となった。

25 日に日付が変わり、トロツキーは、ソビエトの中央執行委員会と大会のために集まってきていた代議員との会議で蜂起を宣言。

深夜 2 時ころからが主要な行動となった。順々に、労働者部隊が、駅、発電所、軍の倉庫、食糧倉庫、水道施設、電話局、国立銀行、大印刷所を占拠し、電信局、郵便局の防御を固めた。

粛々と各施設の守備隊が合流し、貴族の令嬢が交換手の多数を占める電話局では、「私達は革命に反対だ」「いやいや君達の給料は今の給料の倍であるべきであり、すぐそうなる」という議論はあったが、戦闘はなかった。

—25 日
冬宮では、ケレンスキーが、配下の将軍から「臨時政府は敵国の首都にいるようだ」と言うあきらめた報告を受けるにいたり、執政府が動かせる武力が、士官候補生たちくらいしかないことがわかり、アメリカ大使館の車を盾にして、郊外に逃亡した。

朝 10 時には、臨時政府の正式な降伏もまだで、先走りではあったが、「ロシアの市民へ！臨時政府は打倒された。国家権力は軍事革命委員会の手に移った。」との宣言が出された。

士官学校生が立てこもる冬宮を労働者部隊と守備隊が包囲。冬宮の裏を流れるネヴァ河に停泊する戦艦「アヴローラ」からの空砲が断続的に発射され、実弾も数度撃たれたが、宮殿の壁を少し崩しただけだった。

夜にはいり、包囲した部隊が宮殿に入り、士官学校生は、ほぼ無抵抗で降伏した。

「蜂起はどこにもない」、「我々は一人の犠牲者も知らない」街頭から報告された。革命の瞬間に暴力は沈黙した。夕凪のように。

ネヴァ河から「祝祭」のように空砲を撃った戦艦「アヴローラ」

（２）大衆の「政治」が革命を実現した

―大衆の「ソビエト議会主義」

トロツキーは言う。

「大衆は、1917 年 2 月以来、8 ヶ月にわたって、緊張した政治生活を生きてきた。大衆は事件をつくりだしたばかりでなく、事件の関連を理解することを学び、批判的にその結果を評価した。“ソビエト議会主義”が、大衆の政治生活の日常のメカニズムになった。」

イギリステレビ局 BBC が報道したあるフランス人の記録。

「通りのあちこちに人々の輪ができていた。誰かが議論をはじめると、人々は足を止めてそれに聞き入る。様々な政治の意見は、そういう形で人々の間に伝播していた。時々、不穏な空気にもなるが、それも含めて、いまや自然な風景だ。」

「所有権が巨大な力となるのは、法や国家と名付けられる強制システムによって承認を得ている間だけ。しかし、旧法の全体に大衆が疑問符をつけた。」トロツキー

アメリカのジャーナリスト、ジョン・リードは、そのベストセラー「世界を揺るがした十日間」で言う。

「戦線では、兵士たちが士官達との戦いを交え、自らの委員会を介して自治を学んだ。工場では、あのロシア独特の組織、工場委員会が、旧秩序との闘争によって、経験と事故の歴史的使命の自覚とを得た。
ロシア中が読むことを習いつつあった。」

「そして、政治・経済・歴史などを読んでいた。なぜなら、民衆は知ることを欲していたからだ。長い間、阻止されていた教育に対する渇望は、革命とともに狂気のような爆発的表現を示した。」

「スモーリヌイ学院からだけでも、最初の六ヶ月間に、何トン、何車、何貨車、という文書が毎日出て行って国土に浸み込んだ。熱砂が水を吸うように、ロシアは読み物を吸収して、飽くところがなかった。」

—ブルジョアの逃亡、新中間層の反対

「所有権」が宙に浮いたので、ブルジョアは続々と逃亡した。一方、新中間層は「自由」を問題にして、革命に反対した。

ジョン・リードは 10 月 27 日のペテルブルグ街頭の様子をレポートしている。

「街頭にたっていたボルシェビキの兵士 2 人を数百人の群集が取り囲んで罵声を浴びせている。事務員、弁護士、学生、婦人。」

「学生が、“君らはわかっているのか？　ボルシェビキは、皇帝を追い出して勝ち取った自由を壊すんだぞ。”と言う。兵士は、“難しいことはよくわからないが、戦争はないし、土地はくれると言うし、レーニンはいいと思うんだ”とボソボソと答える」

（３）ソビエト大会—講和と土地と労働者の統制

—空砲のなかの大会

「全ロシア第二回労働者兵士農民代表ソビエト大会」の開会予定時刻は、空砲の音が聞こえる中、どんどん遅れて、結局、25 日午後 10 時 40 分から始まった。

6 月の第一回ソビエト大会で、メンシェビキ、社会革命党などの協調主義者は、代議員総数 832 人のうち 600 人という多数を擁していたが、今回は、全体の四分の一以下だった。

今回、総議員数 900 のうち、メンシェビキは 80 人未満で半数が「左派」。160 人の社会革命党のうち、「左派」が五分の三を占め、「右派」は大会の過程で退場も含め、「消え続けた」。ボルシェビキは、開会時点で 390 人だった。

代議員のアンケートでは、505 のソビエトが「全権力のソビエトへの移行」に賛成し、86 のソビエトが「協調主義者」の権力と言っていた。

—ただちに講和と土地と労働者の統制
翌 26 日未明、臨時政府が降伏するなか、大会では、準備はしていたものの、レーニンが大会会場の檀上脇や控室で、大会進行中に書き上げた「講和に関する布告」と「土地についての布告」を決議した。

いずれも会場代議員たちが待ち望んでいたものだった。

「講和の布告」は言う。
「いまや我々は社会主義建設にとりからる。そのためには、まず、戦争を終わらせなければならない。そのために、労働者・兵士・農民代表ソビエトは、交戦中のすべての国の国民と政府に、無併合・無賠償・人民自決権を条件として、3 か月以内の講和交渉の開始を提案する。特に諸国の労働者諸君に提案する。」

「無併合・無賠償・人民自決権」の 3 条件は歴史上始めての講和条件。しかし、植民地獲得が限界に達して、お互いの領土の再分割をめぐって戦われている帝国主義戦争、いわば「空間」をめぐる戦争に対して、革命は、労働者、兵士、農民の新しい歴史、「新しい時間」を創るために行われた。
だから、領土を求めず、領土のない「人民」に自決権を求めた。

レーニンたちも、帝国主義政府が、簡単に交渉に応じてくるわけはないとも考えていた。だから、ロシアよりも先に革命運動、労働運動を闘ってきた長い歴史を持つ、諸国労働者に特に語りかけている。それら諸国で「戦争を内乱」に転じる行動に立ち上がることを期待して。

「土地の布告」は、「地主の土地所有は買い戻し金なしで、即時廃止する。農民の受け取る土地は地方ごとに郷の委員会で決定する。」と、農民が、この 8 か月間、鼻先にぶら下げられたまま、待ち望んでいたことを簡潔に言い切った。

実際の土地の配分も、この 8 カ月間何もしなかった国家レベルでも、県や郡レベルでもなく、農民蜂起の実行機関でもあった郷の土地委員会の差配に任せるとした。

会場の疲れ切った兵士と農民から、涙を拭きながら歓声があがった。

さらに、労働者による生産の統制については、「国防と生活必需品を生産する企業においては、すべての企業で、労働者、労働組合、工場委員会が生産、保管、売買の統制を行う」また、「労働組合が、全国的な生産の統制について国家機能を担う」ことが議論された。

そして、大会で新たに中央執行委員会が選出され、設置することが決められた、レーニンを首班とする「人民委員会議」から、「労働者統制令」として発布された。

この労働者統制は、レーニンが 4 月テーゼでも言っていたことだが、「社会主義建設にとりかかる。今はその入口」と言っているように、まだ、資本家の「所有権」には触れず、「管理」を言っているだけだ。

しかし、「民衆の支配」の道筋を切り裂いていくために、プロレタリア革命の基本的な動力となった労働者、労働組合、工場委員会が、その先兵を担うということであった。

会場の労働者から熱狂的な拍手と歓声が起こり、兵士、農民が労働者に歩み寄って肩を抱き合った。

―ケレンスキーの内乱終了

27 日には、郊外に逃亡したケレンスキーが、騎兵軍団を率いるクラスノーフ将軍と共に、ペテルブルグに進撃したが、翌 28 日には、クラスノーフ将軍が降伏。

ケレンスキーは再度逃亡し、別の軍団の組織し攻撃を試みるが、いずれも軍団の士気はあがらず、ケレンスキーはアメリカに亡命し、内乱は 11 月はじめには終了する。

3.　たちあがった革命の動力の行方

—この動力で、共産主義社会への「過渡期」として、プロレタリア独裁の国家をつくる。この特殊な「国家」、すなわち「民衆の支配」により、階級が消滅し、国家が消滅する。この「力」、「支配」も消滅する。

レーニンは、「国家と革命」に続いて、10 月革命直前に書いた「ボルシェビキは権力を維持できるか」と言う論文で言っている。

「ただちに、下からの大衆自身の創意により、国家生活全体の大衆の積極的な参加により、上からの監督をぬきにし、官吏をぬきにし、民主主義を打ち立てなければならない」

蒸気を噴出した大衆、巨大な革命の動力こそが、国家を自ら統治する意識を持った「民衆」となって、自ら創りだしたソビエトを通じて、民衆の支配、デモクラシー、民主主義を創り上げる力だった。

（１）「汚らしい平和」でも戦争やめる

—ブレスト・リトフスク条約

1917 年 10 月「講和の布告」からただちに、とりあえず、対峙していたドイツと休戦し、講和交渉に入った。兵士は歓声をあげ、ドイツ兵たちと交流した。

レーニンたちの想定どおり、連合国などが、講和に向けて動きを見せない中で、ドイツ政府は、ウクライナ割譲など、屈辱的な講和条件を突きつけてきた。

外務人民委員として交渉にあたったトロツキーは、何とか有利な条件に持っていくために、交渉を長引かせた。「このまま講和を締結するより、″戦争でも平和でもない状態“を続ける方がいい」

国内では、屈辱的な条件で講和するより、ヨーロッパでの革命を支援する意味で、「革命戦争継続」を主張する意見も強まった。

しかし、レーニンは、「たしかに汚らしい平和だ。“革命戦争を“と言うが、ドイツは革命を妊娠しているだけ。ロシアでは赤ん坊が生まれた。これを殺すわけには行かない」として、講和締結を主張し続けた。

1918 年 3 月にいたり、ドイツとの単独講和が、ブレスト・リトフスクで調印される。しかし、10 月革命後、唯一、ボルシェビキと連立していた社会革命党左派は、講和条約に反対、ボリシェヴィキとの連立政府から脱退した。

—社会革命党の反乱

さらに、7 月、社会革命党は、戦争再開を狙って、ドイツの駐ロシア大使を暗殺。これを必死に鎮圧し、人民委員会議は、ボリシェヴィキ単独政権となる。

また、この動きに加えて、反革命の動きが活発化していたため、「皇帝を再び担ぎ出すことを防ぐ」ため、1917 年 2 月以来、ペテルブルグ市内の普通のアパートに暮らしていた、元皇帝ニコライとその家族を銃殺する。

休戦を喜ぶ前線の兵士たち

（２）反革命との戦い、農民との闘争

—反革命との闘い

1918 年 5 月、連合国軍として休戦後もロシアに残留していたチェコ軍の反乱を契機に、反革命の動きが活発化した。

社会革命党は、サマーラで独自政府を樹立し、旧軍将校の率いる軍勢は、国内 4 箇所で、「ソビエト政府打倒」を掲げて旗揚げし、ソビエト政府を四方から包囲する。また、アメリカと日本はシベリアに出兵し、近隣の反革命軍を支援する。

これに対して、ソビエト政府は、1918 年 1 月に、従来の赤衛軍を赤軍として、労働者に加えて旧軍兵士で、30 万人まで組織。連合国も度々干渉したが、第一次大戦での消耗で深追いはできず、結局、ソビエト政府は、1920 年までかかって、勝利する。

—農民との闘争

同じ 5 月には、食糧恐慌が発生。反革命と戦う赤軍の食糧や都市住民の食糧不足が深刻になった。

食糧の不足は、第一次大戦勃発から深刻になっていた輸送の混乱に、飢饉が追い討ちをかけた。一方で、農村では、革命前から土地を買い集めていた富農が余剰食糧を隠匿した。

また、革命後に土地を分けられた農民全般も、「俺の土地と俺の作物だ」と「守り」に入っていた。

ソビエト政府は、「国家機能をまかす」とした労働組合に、赤軍への兵士供給の任務に加えて、農村からの食糧徴発隊の組織を要請した。武装した労働者部隊が農村に向かい、特に富農との闘争が続き、死傷者も多数出た。

反共産主義の陣営の調べだが、この間、餓死者が 300 万人、という情報がある。

（３）ドイツ革命

—11 月革命

1918 年 11 月 3 日、ドイツのキール軍港で水兵が反乱を起こす。
翌日には、ロシアのソビエトを模した労働者兵士レーテ(評議会)が結成される。8 日から 10 日までに間に、ほとんどすべての主要都市で、レーテが結成される。9 日には、ウイルヘルム２世が亡命。

レーニンたちと近かったリープクネヒトたちは、協調主義の社会民主党と袂を分かって「スパルタクス団」を結成していたが、この一連の動きを指導しきれたわけではなかった。

しかし、労働者、兵士の動きを前にして、9 日、首都ベルリンの国会議事堂の窓から、集まった群集に向かって、労働者・兵士によるレーテ執行評議会として、「社会主義政府の樹立」を宣言しようとしていた。

しかし、社会民主党のエーベルトとともにそれを聞きつけたシャイデマンは、リープクネヒトたちが実行するより数十分前に、同じ議事堂の反対側の窓から身を乗り出して、「民主主義共和政樹立」の宣言をしてしまう。

こうして、ロシア 2 月革命の時と同様に、社会民主党など協調主義の人民評議会と労働者・兵士によるレーテ執行評議会樹立の「二重権力」が成立する。

11 日になって第一次大戦は終結。15 日には、協調主義政府のもとで、労働組合連合会代表のレギーンが、労使協調路線を確認する経営者団体と「中央労働共同体」協定を結ぶ。

—1 月蜂起

労働者たちは、この結末に納まらなかった。1919 年 1 月、「スパルタクス団」は蜂起する。

協調主義政府の組織した義勇軍が弾圧に乗り出し、スパルタクス団との戦闘を繰り広げた末に、幹部のリープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグは惨殺され、蜂起は終結する。

―ワイマール共和国、ファシズムへ
その後、1 月 19 日国民議会選挙が実施され、社会民主党が第 1 党を獲得した上で、ワイマール共和国が成立する。レーテは解散される。

世界一、自由で民主的な憲法を擁すると言われたワイマール共和国であるが、第一次大戦後の帝国主義国の体制のなかで、革命を起こし、レーテを結成した労働者、兵士、農民が成し遂げたかったことが、くすぶったまま、ナチス、ファシズムの登場を許していくことになる。

（４）革命１年後

―「労組の国家化」政策の停止
経済崩壊、反革命との内戦、食糧危機が続く中で、労働組合は、企業の生産統制、赤軍、食糧の徴発、と全面的に国家の機能を担う仕事、「労組の国家化政策」に意欲旺盛に取り組んだ。

しかし、当時の労働者の「政治的・文化的水準の問題」もあり、経済統制の無秩序や無責任と言う混乱を起こした。ブルジョアの専門家や官吏を登用せざるを得ない状況にもなった。

革命から 1 年、1919 年 1 月第二回労組全ロシア代表大会では、「労組の国家化政策」を停止することになった。

しかし、レーニンは、その報告で、「この困難な状況のなかで、労組が国家機能を担い果たした成果はすごい。全面的な労組の国家化は一旦停止するが、それは、今までと全然変わらず、将来の目標である」

そして、「闘うべき大資本家がいないのだから、労組はいらない」という声を一蹴し、「労組は一部、国家機能を担い続ける。それを通じて、広範な大衆が統治へ参加するための教育機関である。」

さらに、「労組は、また、当面、ブルジョアの専門家を登用することなどで、すでに生じている官僚主義から労働者を守るために闘う機関である。」

つまり、「下からの大衆自身の創意により、国家生活全体の大衆の積極的な参加により、上からの監督をぬきにし、官吏をぬきにした民主主義」のために、労組を「共産主義の学校」とした。

―「ブルジョア化」との闘い

1918 年 11 月の臨時全ロシア大会での「革命 1 周年についての演説」でレーニンは言う。

「我々は、昨年 10 月には、農民の古い、幾百年来の敵である農奴的地主、巨大土地所有者を直ちに一掃するだけにとどめた。これは全農民の闘争だった。」
「我々は、どんな場合にも、大衆の発展に先走ってはならず、大衆自身の経験から、闘争から、成長してくるのを待たなければならない。」

「食糧難がおこり、飢えが起こったとき、穀物の投機によって前代未聞の富を儲けていた富農に反撃を加えた。その 7 月には、農村のいたるところで、農業労働者が都市労働者とともに立ち上がった。」

しかし、農民の動きは、早くはなく、また、都市の新中間層も含めて、「ブルジョア」の秩序に戻ろうとする動きに、レーニンは 1920 年になって、あらためて書く。

「大ブルジョアには打ち勝ったが、農民や小生産者などを、排除することはできない。彼らとは、ほんとに、仲良くしながら、時間をかけて、説得し、“ブルジョア化”と闘っていく必要がある。」

（５）憲法制定議会とソビエト憲法

―憲法制定議会選挙と解散

2 月革命から 8 ヵ月後に日程を設定し、何もしない言い訳として、ケレンスキー、社会革命党、カデット（保守党）が入り乱れて、「憲法制定議会ですべてを決める」と言ってきていた。

10 月革命直後の 11 月には、ボルシェビキも「公約」していた、その「憲法制定議会選挙」が行われた。

結果は、投票総数 3 千 6 百万票のうち、社会革命党 2 千万票、ボルシェビキ 9 百万票、カデット 186 万票、メンシェビキ 67 万票、だった。

レーニンは、この結果の「重味」も踏まえて、「布告」や「テーゼ」など何種類もの「憲法制定議会」についての見解を必死に大衆に示す。

「社会革命党は、2 千万票を獲得したが、この選挙の名簿は、10 月革命のだいぶ前に作成されている。一方、社会革命党の約半数は、10 月革命で、社会革命党左派として、我々ボルシェビキと連立している。」

「だから、有権者は、それを選び分けることができていない。それも踏まえて、この選挙結果から、労働者・農民・兵士が闘いとったソビエト政府を拒否することはできない。我々は、憲法制定議会を開催して、このソビエト政府の精神をまとめた“勤労被搾取人民の権利の宣言”を議論していく」

しかし、1 月に開催した憲法制定議会では、協調主義者、保守主義者が結束して、この「宣言」の審議を拒否し、延々と対案なるものの議論を続けた。

レーニンは「彼らは、議場外でも、ソビエト政府打倒を公然と叫び運動しており、議場内での議論は、打倒のためだけである」として、最後は、議場警備兵と議論し、警備兵が、「俺達は疲れた。もう、みんな出ていってくれ」と議員たちに通告し退去させ、議会は解散にいたる。

1 年後に、レーニンは、その後の経緯を総括して言う。
「その後、我々は、プロレタリアだけでなく、社会革命党の支持層でもあった非プロレタリア的勤労大衆の多数者を味方につけることができた。」

「それは、ソビエトを通じてだった。ソビエトには、ありとあらゆる搾取者を排除して、勤労大衆が加入を許された。また、革命後、数時間のうちに″土地の布告“を発し、農民の多数者の最も切実な要求を実現した。」

―ソビエト憲法

この過程で、1918 年 7 月、第五回全ロシア・ソビエト大会が開かれ、ロシア・ソビエト憲法が定められた。

この憲法で、世界ではじめて、8 時間労働制を定め、女性に参政権を与えた。

一方で、搾取者―利潤を目的として賃労働者を雇う者には選挙権はないと規定した。

「ブルジョアに選挙権を与えない」ことをめぐって、ドイツ社会民主党の重鎮カウツキーの批判に対して、レーニンは答える。

「ブルジョアから選挙権を取り上げることは、プロレタリア独裁にとって、必須の標識ではない。10 月革命前に前もって言っていた訳ではない。闘争の過程で自然に現れたのである。カウツキーはこのことに気づいていない。」
「まだ、協調主義者がソビエトを支配していた時に、ブルジョアが自分でソビエトから離れ、ボイコットし、対立し、陰謀をたくらんだことを理解すべきだ。」

「ソビエトは、どんな憲法も持たずに生まれ、2 月革命から 1 年以上もどんな憲法も持たずに存続した。そんな組織に対して、7 月のコルニーロフの乱に正式に参加したことをダメ押しとして、ブルジョアが闘争を続けたことが、ソビエトからの正式な排除を準備した。」

全ロシア・ソビエト大会のボルシェビキの比率の推移（レーニン調べ）

	日付	代議員数	ﾎﾞﾙｼｪﾋﾞｷ	比率
第一回	1917 年 6 月 3 日	790	103	13%
第二回	1917 年 10 月 25 日	675	343	51%
第三回	1918 年 1 月 10 日	710	434	61%
第四回	1918 年 3 月 14 日	1232	795	64%
第五回	1918 年 7 月 4 日	1164	773	66%

（６）ロシア・アヴァンギャルドの開花

第二回「1905 年の革命」の最後で、レーニンの革命を「歴史」の終結と新しい歴史の開始として、熱狂的に受け止めたマレーヴィッチの絵画を紹介した。

彼を先駆者とする、絵画や絵本、各種ポスター、服飾や陶器のデザインなど広い範囲の芸術運動、ロシア・アヴァンギャルドが、10 月革命で一気に花開いた。

最近、出版された「ロシア・アヴァンギャルドのデザイン一未来を夢見るアート：2015 年 4 月」のなかで、編者海野弘は言う。

「ロシア革命は、芸術にとっては極めて不利な状況だった。食糧も家も不足し、人々は飢え、寒さに凍えていた。絵具もキャンバスも不足し、内乱は続き、落ち着いて制作する時間もなかった。アーティストは、ありあわせの、極めて貧しい材料で、急いでつくらねばならなかった。」

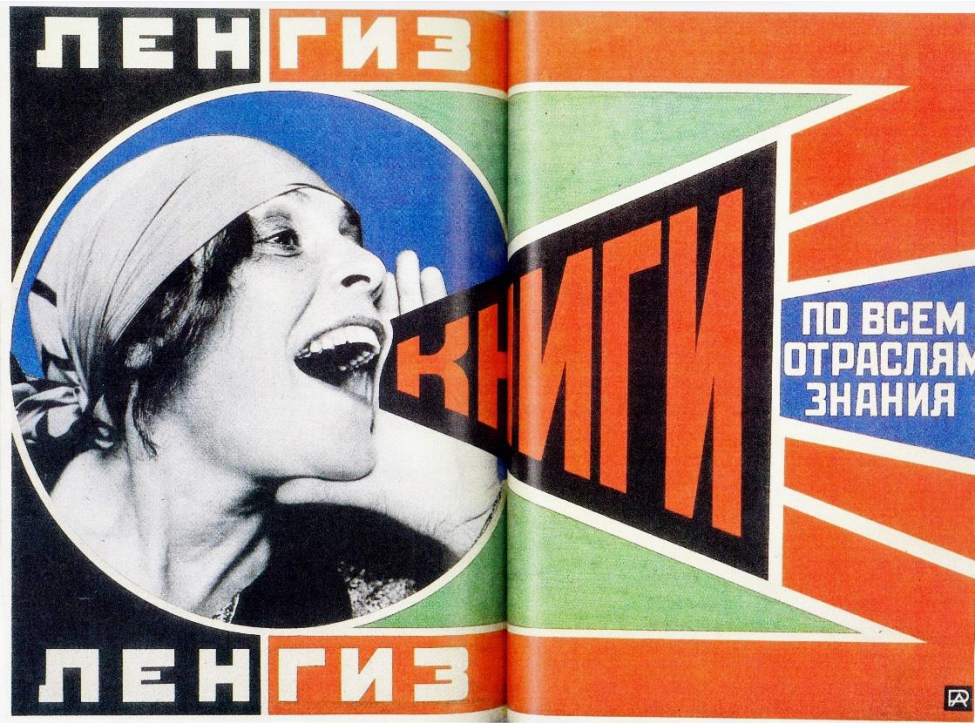
「しかし、極めて劣悪な環境のなかで短期間につくられたことが、ロシア・アヴァンギャルドの大胆で新しい、今なお色あせない魅力をつくりだしている。」ホッチキスでとめただけの絵本が輝いている。

「伝統的な、ゆっくりと手間ひまかけた、ぜいたくな芸術作品をつくる余裕も時間も許されていなかった。それだからこそ、古いやり方、アカデミズムから自由な表現をつくり出すことができた。」

「革命期であるため、安価に、スピーディーに大量の作品をつくらねばならなかった。一部のエリートのためでなく、大衆のだれにも手に入れることができる、まただれにでもすぐにわかり、メッセージが伝わりやすいものでなくてはならなかった。」

「今なお魅力的なのは、その形と色が、世界を新しく読み直すための形態言語として私たちに語りかけてくるからなのだろう。」

新しい歴史を「読みたかった」大衆の蒸気が、その「言語」を創った。



国立出版社の広告ポスター「あらゆる知についての本」
アレクサンドル・ロトチェンコ 1924 年
女性が「本よ！」と叫んでいる

バレエ「火の鳥」の背景の幕のデザイン：ナターリア・ゴンチャローワ 1926 年

（７）スターリンは「巨大な革命の動力」を恐れた

レーニンの死後、スターリンは、ヨーロッパでの革命を信じず、「ロシア一国で社会主義ができる」とし、国内では、自分に権限を集中し、「プロレタリア独裁」ではなく、ほとんど個人としての独裁のもとで「官僚支配」を行っていった。

それは、レーニンが追求した「革命の動力、大衆の蒸気」、「その巨大な大衆の動力で″民衆の支配を実現する」という流れからすると、スターリンが、この「たちあがった巨大な動力」を恐れ、扱いきれず、蓋をしたという姿。
「民衆の支配」の尖兵としての労働組合も押さえつけ、ロシア・アヴァンギャルドも窒息した。

4.　まとめに代えて―100 年前のロシア革命と今の日本

（１）「プロレタリア独裁⇒民衆の支配：デモクラシー」と「自由民主主義」の日本

レーニンが、「たちあがった巨大な革命の動力、大衆の蒸気」で「デモクラシー」の語源である「民衆の支配」を実現しようとしたと見てきた。それに対して、今の日本はどうか。

レーニンたちがはじめた「プロジェクト」は、「3 日持つかどうか」と言われながら、曲りなりにも「ソ連」として 70 年間存在した後崩壊した。

その後、日本に生じてきた政治的現象は、まず、最悪の低投票率。「二人に一人も投票に行かない事態」。言い換えれば、「政治的想像力の恐るべき貧困化」。

「ソ連」の存在を意識して、他の数少ない「先進資本主義国」とともに、日本は、「福祉国家」「国民の総中流化」を実現したように見えたが、ソ連崩壊後、その「中流」の基盤は完全に崩壊している。

そして、近代資本主義国家が目指してきた「自由と民主主義」を、世界で唯一、そのまま「党名」とする政権が、2割しか支持を得ていないのに、議会で2/3の議席を得て、「戦争をする議決」をするのは、前にも見たが、「民主主義は思想ではなく、多数決の方法でしかない」ことを示している。

たしかに、レーニンの時代と比べると、工場の労働者に対する「新中間層」が圧倒的に増えている。また、年金制度も確立していなかったロシアに比べて、「年金生活者」の存在感がとても大きい。

しかし、「中流の基盤」が崩壊し、「新中間層」は労働者である。そして、「年金生活者」の多数が、働かざるを得ない老齢労働者である。

それら労働者を含めた「街頭と議会の中間」による「民衆の支配」が必要である。

（２）輸入8割で、世界の農民と非正規労働者に依存する日本

ロシア革命は、「2割の労働者の蜂起と8割の農民の農民戦争」としたが、今の日本に農民はいないか。

「５％の農業を守るために95％が犠牲になってはいけない」とTPP交渉にあたって当局者が言った農民が、必死に「我々の土と土でできたもの」を守ってくれている。

それに加えて、我々は、世界一の食糧輸入国として、世界の低賃金・長時間労働で働く農民に依存している。製品輸入も8割を占め、世界の非正規労働者に依存している。ユニクロの製品は、バンクラデシュの時給10円の女性縫製工が縫い、スマホの希少な鉱物は、コンゴの子どもたちが拾い、中国のこどもたちが、廃品の部品回収をしている。

いいかえると、世界のすみずみまで資本主義が浸透した結果、レーニンの時代とも比べようもなく、「資本主義が利潤を得る空間、外部」が消滅し、どこまでも低賃金の農民、非正規労働者を追いかけてやっと成り立つ状況である。

（３）今、8 時間労働制を壊し、非正規 9 割を狙う日本

日本の国内では、ロシア革命でやっと勝ち取った「8 時間労働制」を 100 年を経て、「残業代ゼロ法」で「労働時間に応じた賃金」の原則を壊そうとしている。

これに加えて、「準正社員制度」を推奨し、「派遣労働者法」を改悪して「一生派遣労働者」を可能にして、「正社員」を 1 割に、非正規社員を 9 割にしようとしている。

正社員である「新中間層」が壊され、働かざるを得ない老人は、「一生派遣労働」になる。

これが、「世界で一番企業が動きやすい国」にするための「成長戦略」の目玉である。「世界でもうける空間がなくなった」結果である、このむき出しの動きは、レーニンたちを取り巻いた帝国主義国のさらに末期の姿である。

（４）「原発と戦争と天皇制で儲けようとする」日本

ロシア革命は、「直接には君主制を打倒」したのであり、今の日本は「民主主義の国」ではないのか。

しかし、今の政権が「戦争法」の前提にしている「自民党憲法草案」では、「戦争できること」と「人々の権利を公益で制限すること」の仕上げとして、「天皇を国家元首」にする。

戦争をした昭和天皇は、1918 年、元皇帝ニコライが家族とともに銃殺され、ドイツ革命で皇帝ウイルヘルムが亡命したその年に皇太子として結婚した。

最近、研究者が次々に明らかにしているように、第二次大戦末期に、側近の近衛首相が「日本にとって最も恐ろしいのは共産主義」と書いたとおり、公式には労働組合も共産党も社会主義者も徹底的に押さえ込んでいたにも関わらず、昭和天皇が「最も恐れていたのは共産主義革命」。

実際、彼がポツダム宣言受諾を了承したのは、1945 年 8 月 6 日の広島原爆の悲惨な状況を聞いた時ではなく、ソ連が参戦したと聞いた時だった。そして、敗戦後、マッカーサーを訪れて、「天皇制を維持するなら沖縄を自由にしていい」と言った。

事実、敗戦後日本の労働運動の盛り上がりは、電力会社の労組、電産を先頭に巨大なものだった。朝鮮戦争を前に、マッカーサーはそれを共産主義との戦いのために天皇の体制の維持が必要と押さえ込む。

電力会社を 9 分割して労働組合を解体する。その後、「福祉国家」を実現するように見せながら、戦争と核に反対する陣営の中心でもある闘う労働組合を解体し続け、国鉄分割民営化で 20 万人の国鉄労働組合を解体した。

今、復活した戦犯、戦前の体制の勢力の末裔が、「天皇国家元首」を言う。
決して、時代錯誤の封建制を言っているわけではない。

秘密保護法を施行して、すぐ取り掛かったのが、「武器輸出 3 原則」の撤廃であるように、この末期の資本主義体制の維持・延命を賭けて、戦争を通じても「儲けるための足掻き」である。
それに「民」は黙って従え、と言う体制、「国」づくりである。

今、レーニンが目をこらした時代が

近づいている

「黙って従う国」ではなく

労働組合に集まり、評議会を創り

「民衆の社会」を創ろう！

2011 年 3 月 11 日から

革命は始まっている

ロシア・アヴァンギャルド
絵本「サーカス」から

Thank you Rintaro！　We fight to get there together!!

編者：りんたろうSHOBO店主＆プチ労働者学校のみなさん

発行日：２０１５年７月２６日＠プチ労その６３

カンパ希望額：５００円

編集・発行：りんたろうＳＨＯＢＯ

発行所：目黒区南１－２４－１４

「反原発☆反失業リサイクルショップたみとや」内

TEL：03-6662-8205　メール：rintarowhole@gaea.ocn.ne.jp